

第3章 庭園の価値

第1節 本質的価値

本庭園の本質的価値は、観賞上の価値と学術上の価値に整理される。その概要は指定文化財の説明文で既に示されているが、本章で整理した沿革と史料や庭園の内容を踏まえ、本庭園の本質的価値を以下に総括する。

肱川が生み出す変化に富んだ水郷の景観

臥龍の淵は河川の永年にわたる浸食作用により形成された天然の奇勝地である。臥龍及び亀山は、近世の名所図会に景勝地として紹介され、近代には多くの絵葉書や絵画の画題となっている。これらの資料から、臥龍は亀山や対岸の如法寺河原、時には川舟から眺める対象であったことが確認できる。各視点場からは、深い碧をなす「臥龍の淵」やきらびやかに輝く水面が四季折々に刻々と移り変わる表情豊かな肱川の情景を眺めることができる。

臥龍と亀山は肱川の水面を介して対峙し、一体的な景観となっている。往時は、浮亀橋や川舟、如法寺などがそれらの添景となっていた。肱川がつくり出した自然景観は、水郷大洲を代表する景である。

崖地の地形を利用して雄大な自然と一体となった眺望の庭園

臥龍山荘の地は、かつて歴代藩主が愛でていた遊賞地であった。この地に河内寅次郎が明治期、石垣を築き、細長い敷地を造成して庭を造り、別荘を建てた。臥龍山荘からは臥龍の淵の奇観、対岸の中島（蓬莱山）、遠景の富士山や梁瀬山、根太山など、雄大な風景を眺めることができる。いわば眺望景を見るために造られた庭である。

近代ブルジョワジーが独自の美意識を発揮し数寄を凝らした別荘

臥龍山荘には、近代ブルジョワジーであった河内寅次郎の庭へのこだわりが随所に表れている。

庭石は、地元の結晶片岩と輝緑岩を中心に、伊予市双海町上灘のげんだ石や大阪淀屋辰五郎の庭にあったとされる手まり石、御影の石造物などを取り寄せて作庭する。一方では意図的に飛石に転用石を用いている。また、石垣を築造する際に自生の樹木を故意に残すなど従来にはない手法である。主庭から蓬莱山にかけて藤を這わせた藤雲橋を架けるなど、神仙思想の表現が見られ、植栽でもサルスベリやコウヨウザンなど当時流行していた樹木を用いている。

建造物や庭園は、多彩な手法による創意工夫の跡が随所に見られ、施主の強いこだわりが表れている。

第2節 地区区分と空間構成

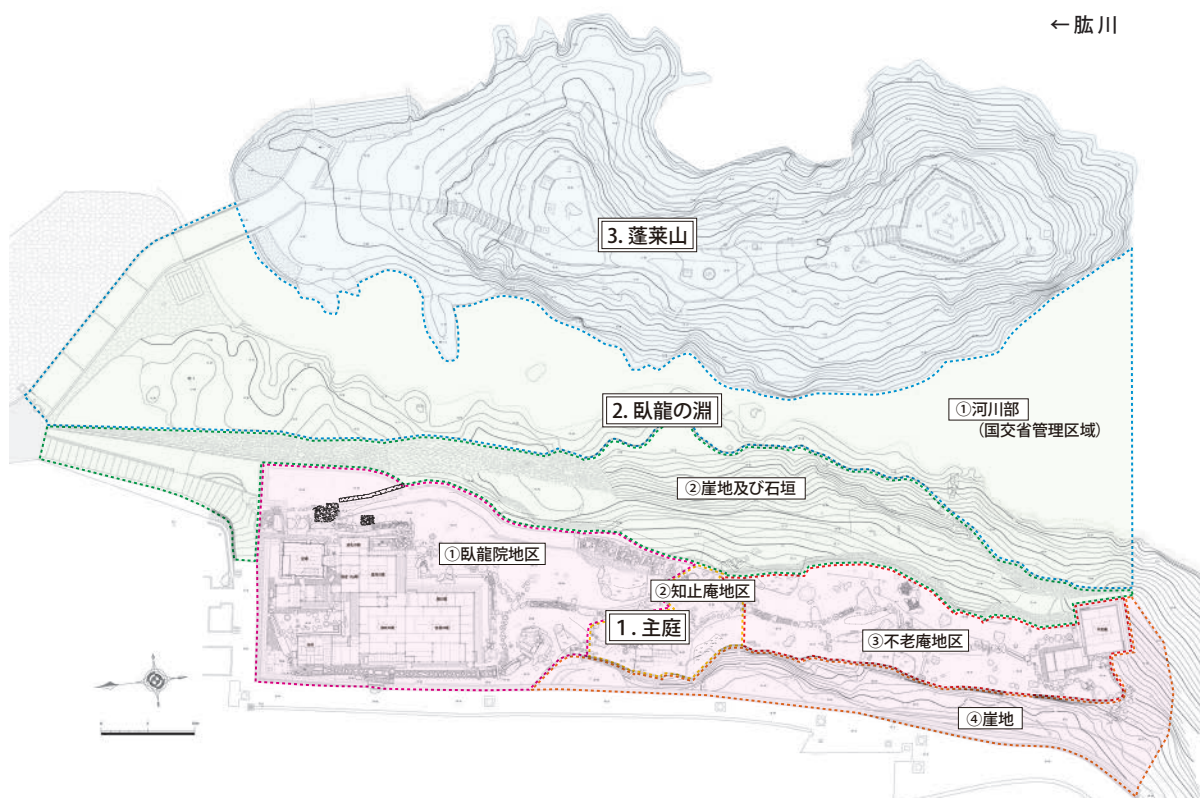
第1項 地区区分の設定

本庭園の地区区分については、名勝地調査事業において既に設定しているが、本計画では名勝地調査事業後に行われた調査により、新たに地区区分を設定することとする。

本庭園は肱川に望む崖地に立地し、崖地の東側には蓬莱山と呼ばれる島がある。庭園と蓬莱山の間には、肱川が蛇行して生まれた臥龍の淵で構成される。このような地形や地割の特性から本庭園を主庭、臥龍の淵、蓬莱山の3つに区分した。

主庭は、崖地の上に石垣を築いて造成した土地に造られた臥龍院など、建造物周辺に広がる庭園部分とする。臥龍の淵は庭園部分と蓬莱山の間にあたり、岩盤が露出する河川部分とし、蓬莱山は肱川内に位置する島部分とする。

さらに、主庭と臥龍の淵は小区分を設定した。主庭においては建造物の配置によって小区分し、臥龍院を中心とした臥龍院地区、知止庵を中心とした知止庵地区、不老庵を中心とした不老庵地区、庭園の南東部の岩盤が露出した崖地の4区分とした。臥龍の淵においては、肱川の流れてある河川部、岩盤上に石垣を造成した崖地及び石垣の2区分とした。



〔図 3-1〕 地区区分図

第2項 各地区の空間構成

(1) 主庭

主庭は崖地に造成した平坦な敷地にあり、建築と庭園が造営された。そのため北、東部に輝緑岩の高さのある石垣を築き、南西部は岩盤が露出した崖地となっている。石垣の上には6本の瓦筋が入る高さ1.2 m程の土塀を設け、北、西辺を区画する。

庭園は南北に長く広がり、北端に邸宅の入口となる正門、北部には臥龍院、土蔵の文庫が建ち、

建造物が集中している。そのほか、庭園の中央部には茶室である知止庵、南端には茶室を備えた離れ座敷である不老庵が建っている。そのため主庭は臥龍院とその中庭及び南庭からなる臥龍院地区、知止庵とその周辺の庭園としての知止庵地区、不老庵とその周辺の庭園としての不老庵地区、南西部の岩盤が露出した崖地の小区分を設けた。

①臥龍院地区

臥龍院地区は大区分である主庭の北部にあたり、主屋にあたる臥龍院周辺の庭園である。敷地の北端にある薬医門形式の正門から玄関へ至るアプローチを進むと、右手には石垣がそびえ、中ほどの位置からチシャノキが生えている。げんだ石で造られたらせん状の石段を上ると右手に臥龍院玄関、左手には「路次門」（露地門）がある。トクサ張りの「路次門」を潜ると、臥龍院前の縁先空間が広がる。

臥龍院は雁行型に座敷が配置され、庭園に面した壺是の間が庭園の視点場となる。この臥龍院の縁先には鉢型の縁先手水鉢、その右手には袖垣が設けられている。正面には大きな井戸があり、4尺四方の花崗岩をくり抜いた井筒や自然木を利用した釣瓶などで飾られる。「路次門」から続く園路は臥龍院正面で井戸方向と庭園奥へ分岐し、多様な石材や形、飛石と延段を組み合わせ、庭園の奥にある不老庵まで続く。その両脇には築山や石燈籠などの構造物を配し、東側には臥龍の淵を望む。また、東の崖沿いにも園路があり、石臼などを用いた石段となっている。

臥龍院の中庭は建造物の北側にあり、建物に囲まれた細長く、小さな平庭である。雪隠に続く濡縁の脇に欄干型の立手水があり、中庭の添景となっている。東側には雪隠、南に清吹の間、次の間の板廊下、西は杉板張りの台所で三方を囲われ、北側は土塀となっている。



〔写真 3-1〕 アプローチの石段と石垣



〔写真 3-2〕 臥龍院東側



〔写真 3-3〕 臥龍院南側



〔写真 3-4〕 臥龍院中庭

②知止庵地区

知止庵地区は大区分である主庭の中央部分にあたり、敷地の中央に位置する知止庵周辺の庭園である。知止庵地区は中門があった位置から知止庵へ到る園路及び知止庵周辺を範囲とし、中門跡から続いた南北を繋ぐ飛石の園路及び知止庵前の蹲踞などを備えた空間からなる。

知止庵東側には2石のげんだ石を用いた延段の先に、踏込石と敷居が残る。古写真や中野家資料によると造営当初、弧を描いた屋根の掛る中門があった。この中門跡が、空間の結節点であることを知らせる。現在は知止庵の東から南にかけてマキの生垣が空間を囲い結界としている。

園路の合流地点は、大振りな伽藍石が踏分石として配され、伽藍石の位置からは臥龍の淵や蓬萊山の景を望むことができる。南へ続く飛石は延段前で西に分かれ、小振りな飛石が知止庵まで続いている。飛石の東側には石燈籠や蹲踞が置かれ、知止庵前の額見石や塵穴など、露地的な空間が広がっている。

知止庵は造営当初「浴室便所」であったが、昭和24年（1949）に内部を改造して茶室とした。



[写真 3-5] 中門跡



[写真 3-6] 知止庵前



[写真 3-7] 知止庵前の飛石



[写真 3-8] 知止庵前の蹲踞

③不老庵地区

不老庵地区は大区分である主庭の南部にあたり、茶室を備えた離れ座敷である不老庵周辺の庭園である。不老庵地区は知止庵と不老庵へ進む飛石の踏分石から、最南端の崖地に張り出して造られた不老庵までの範囲とする。

南北に長い園路は飛石と延段からなり、豊富な種類の石材で構成され、緩やかに曲がりながら不老庵へ続く。飛石は不老庵前で座敷方向と茶室の躡口方向へ分かれ、茶室の周囲を飛石が囲む。

不老庵北側には、自然石をくりぬいた蹲踞を中心とした手水があり、崖地と不老庵の間からは

肱川を望む。

不老庵は茅葺屋根の懸造の建造物であり、その座敷からは眼下に深淵部の臥龍の淵や蓬莱山、周辺の山々を望むことができる。不老庵の前には石碑や鯢瓦、狸の石造物などが置かれている。

昭和31年（1956）作成の文化財指定候補調書の略図には、不老庵地区北部、延段の付近に藤柵（柵）の記載があり、不老庵と知止庵の結界を兼ねていたと考えられる。またその南部には平成初期頃まで雪隠（便所）が設置されていたものの、現在は失われている。



〔写真 3-9〕 不老庵地区



〔写真 3-10〕 不老庵



〔写真 3-11〕 不老庵東側

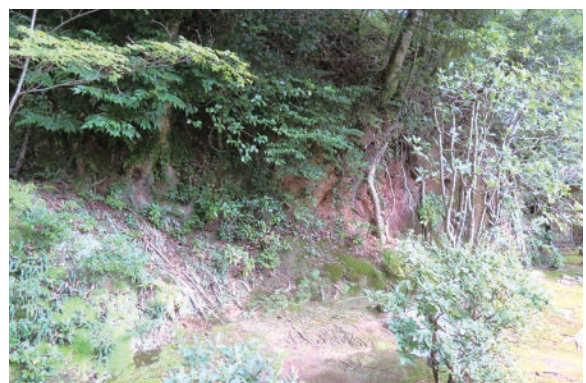


〔写真 3-12〕 不老庵西側

④崖地

崖地は大区分である主庭の西部にあたり、臥龍院の南西から不老庵まで続いている。主庭の西辺はほぼ崖地であり、岩盤が露出した植栽帯となっている。崖面の中央南寄りには潜龍洞と名付けられた水室、不老庵の西側には湧水を利用した横井戸などがある。昭和31年（1956）頃には、知止庵西側の崖地にも臥龍窟と呼ばれる岩穴があったようだが、現在は石垣となっている。

崖地は部分的に輝緑岩の石垣が築かれており、そのほとんどは崖地の崩壊を防ぐために昭和～平成期に施工したものであるが、潜龍洞周辺の石垣は一部補修しているものの、当初のものであると考えられる。



〔写真 3-13〕 崖地

(2) 臥龍の淵

臥龍の淵は肱川の深淵から続く主庭と蓬莱山との岩盤が露出する河川区域である。

この区域は、肱川によって形成された河川部と、岩盤から切り立った崖地に石垣が築かれた崖地及び石垣によって構成される。

①河川部

臥龍の淵は肱川が蛇行する流れによって形成された深淵部で、近世の名所図絵にも描かれた景勝地である。本計画では、蓬莱山と呼ばれる島と護岸である崖地の間の河川部分を指す。

淵は肱川の深淵から続き、東西を切り立った崖に囲まれ、西側の蓬莱山の一番高い場所とは水面から 10m 程の高低差がある。再び肱川に合流する北部には、河川敷と蓬莱山を繋ぐコンクリート製の渡河橋が架かる。不老庵の北東部では岩盤を加工した舟着場跡と石段が確認されている。



〔写真 3-14〕 臥龍の淵（南より）



〔写真 3-15〕 臥龍の淵（北より）



〔写真 3-16〕 船着場跡と石段

②崖地及び石垣

崖地及び石垣は、露出した自然の岩盤上に石垣を築いた区域である。石垣を築造する際には自然の崖地や自生の樹木を取り込んで残すなどして、特徴的な景観となっている。臥龍院東側の石垣には、樹木が枯損して失われた箇所へ地藏菩薩を納めた石室、不老庵下の石垣には造営時の記録を刻んだ石碑が組み込まれている。

また、知止庵付近の伽藍石の南東には臥龍の淵への石段が設けられ、舟着場跡へ下りることができ、その途中にはかつて岸と蓬莱山を繋いでいた藤雲橋の親柱が残る。

藤雲橋は絵葉書などから架線状のもので繋がっていたとされ、現在も親柱にワイヤーが巻き付けられた残欠が確認できる。新聞記事には「涼を呼ぶ藤が針金二本で緑の橋を架けている」（海南新聞 大正 5 年（1926）7 月 11 日記事）と具体的な描写がされており、景色としての橋であったと考えられる。

北部には崖地沿いに主庭区域へ登る石段が整備されており、正門へと到る。



[写真 3-17] 石垣



[写真 3-18] 藤雲橋の親柱（主庭側）

（3）蓬莱山

蓬莱山は肱川に浮かぶ南北約 100m、東西約 40m の島で、島全体を区域とする。島は 2 つの高みを持ち、最も高い箇所は 10m 程の高さがある。2 つの高みの間に入江状になっており、江戸末期の名所図会には入江状の州浜部分に舟を寄せる様子や道が描かれ、川舟からの荷揚げ場あるいは舟入として使用されていた可能性が考えられる。現在は蓬莱山北東側に舟着場が整備され、鵜飼いやお舟めぐりの乗船場となっている。

蓬莱山は都市計画緑地として整備されており、尾根筋と入江に通じる島の東側沿いに園路が設けられ、南端には東屋が整備されている。園路の周辺には地藏菩薩や石碑、藤雲橋の親柱などがある。



[写真 3-19] 北西方向より見た蓬莱山



[写真 3-20] 南東方向より見た蓬莱山

第3節 庭園の構成要素

地区毎に本質的価値を構成する要素（以下、構成要素という）を整理する。

本庭園の構成要素は『史跡等整備のてびき【計画編】』（文化庁文化財部記念物課 2004 年）を参照し、地形／地割、水系、石／石組、植栽／植生、構造物、建造物として分類する。

さらに構成要素のほかに、本質的価値と密接に関わる要素や本質的価値に準ずる要素、庭園の活用及び管理運営のために必要な要素を整理し、指定範囲内だけでなく、指定範囲外の周辺環境や眺望などについても検討する。

第1項 主庭

（1）臥龍院地区

臥龍院地区の主要な構成要素を表と図で示し、その中から抜粋した構成要素について述べる。

〔表 3-1〕 臥龍院地区の主要な構成要素

指定区分	分類	構成要素	
名勝指定範囲内	本質的価値を構成する要素	地形／地割	前庭、中庭、平坦地、築山、園路
		水系	—
		石／石組	石垣、景石、沓脱石、石段、飛石、延段
		植栽／植生	高木類、中木類、低木類、生垣、地被類など
		構造物	石造物：井筒、石燈籠、手水鉢、石造物 垣 根：土塀、「路次門」、袖垣、見切り垣（庭門） その他：釣瓶、鯉瓦
		建造物	臥龍院、文庫、正門、勝手門、隅小屋
	本質的価値に準ずる要素	擬木柵、腰掛	
	庭園の活用及び管理運営のために必要な要素	案内板、水栓、防災及び防犯設備、侵入防止柵、排水路、排水樹	

【地形／地割】

・前庭

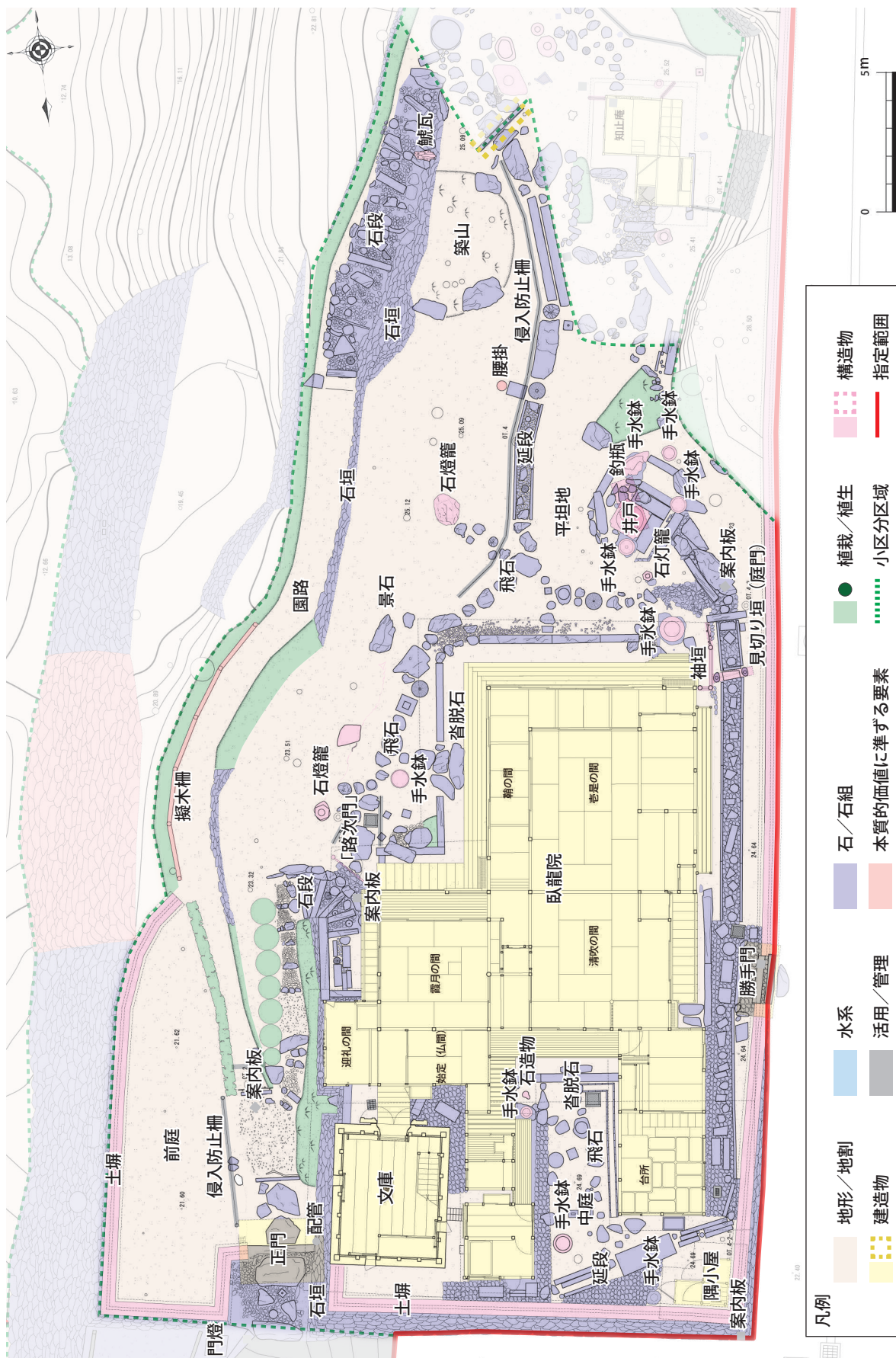
正門を入って左手には、湾曲した土塀に囲まれた平坦地が広がり、前庭を形成している。前庭は北側の道路面とほぼ同じ高さであり、臥龍の淵の岩盤から約 10 m 高い位置にある。

・中庭

内庭は臥龍院の清吹の間の北縁に面して設けられており、南北に細長い平庭である。東には濡縁に続く雪隠、南に清吹の間、次の間の板廊下、西は杉板貼りの台所で三方を囲われ、北側は土塀越しに奥へと空間が抜ける。



〔写真 3-21〕 臥龍院地区 前庭



〔図3-2〕臥龍院地区の主要な構成要素図

・平坦地

平坦地は臥龍院前に広がり、前庭から約2 m上に位置する。この平坦地は庭園の南端まで長く続き、知止庵付近では築山や高まりを持つ。築山や高まりがあるため、臥龍院前では奥まで見通せず、空間に奥行きをもたせている。

・築山

築山は知止庵東側の園路脇に設けられ、飛石が配された平坦地に起伏を設けて変化を付けている。築山上にはソテツ群が植えられ、ソテツの足元には草本類、築山裾部には紅れん石片岩の大きな景石が据えられている。

【石／石組】

・石垣

石垣は本庭園の主庭部分を支えるため、各所に築かれている。正門を入ってすぐの右手には輝緑岩や黒色片岩の割石を用いた流れ積や末広積の石垣がそびえる。石垣の途中では、元々生えていたチシャノキを取り込み、また手水鉢や石臼を積み石として用い、意匠的に築いている。石垣の上には文庫が建つ。

・飛石

飛石は輝緑岩と緑色片岩を中心に伽藍石や石臼を転用したもの、手まり石（大坂淀屋辰五郎の庭園にあった石と伝わる）と呼ばれる節理によって模様の入った丸い石などを用いてアクセントを持たせている。飛石だけでなく、延段と組み合わせ、変化をつけている。

【植栽／植生】

・臥龍院地区の植栽

高木にはモッコク、イロハモミジ、ヤマモモ、イヌマキ、サルスベリがあり、知止



〔写真 3-22〕 臥龍院地区 中庭



〔写真 3-23〕 臥龍院地区 築山



〔写真 3-24〕 臥龍院地区 石垣



〔写真 3-25〕 臥龍院地区の植栽

庵東側にはソテツが植えられている。低木にはサツキ、センリョウ、アオキ、チャノキが見られ、地被類はコケ類を主体として、ツワブキやクマザサなどの草本類が植えられている。

【構造物】

・井筒、釣瓶

井筒は臥龍院の南にあり、約4尺四方の花崗岩をくりぬいて作られている。釣瓶は袖屋根付きであり、げんだ石の基礎部に自然木を組み合せて釣瓶軸とし、木製の小屋根を滑車上と釣瓶軸上の2箇所にかけている。

・見切り垣

見切り垣は臥龍院西側にあり、庭園と臥龍院裏や勝手門を繋ぐ庭門である。杉皮を用いた曲線状の屋根が掛る。

【建造物】

・臥龍院

臥龍院は木造平屋建の寄棟造の住宅建築で茅葺、一部瓦葺屋根である。桂離宮、修学院離宮などの名建築を参考にし、寅次郎自らが構想を練り、京都の相談役の助言を受けながら、地元の大工 中野寅雄がまとめた建築である。各部屋は機能的に間取りが考えられ、室内構成もそれぞれの意匠を工夫している。南に位置する壺是の間(主座敷)から蓬莱山と富士山への眺望及び南庭を觀賞することができる。

・文庫

文庫は臥龍院の北に位置し、廊下で接続された土蔵である。寄棟造、置屋根の棧瓦葺である。外壁には古舟板を用いている。1階、2階共に板敷の1室としており、西側に階段を配している。



〔写真 3-26〕 臥龍院地区 飛石



〔写真 3-27〕 臥龍院地区 井筒、釣瓶



〔写真 3-28〕 臥龍院地区 見切り垣



〔写真 3-29〕 臥龍院地区 臥龍院

(2) 知止庵地区

知止庵地区の主要な構成要素を表と図で示し、その中から抜粋した構成要素について述べる。

[表 3-2] 知止庵地区の主要な構成要素

指定区分	分類	構成要素	
名勝指定 範囲内	本質的価値を構成する要素	地形 / 地割	平坦地、傾斜地、小丘
		水系	—
		石 / 石組	景石、石組、沓脱石、石段、飛石
		植栽 / 植生	高木類、中木類、低木類、生垣、地被類など
		構造物	石造物：石燈籠、燈籠台座、手水鉢 垣 根：袖垣 その他：塵穴
		建造物	知止庵、中門跡
	庭園の活用及び管理運営のために必要な要素	案内板、解説板、防災・防犯設備、侵入防止柵、排水路	



[図 3-3] 知止庵地区の主要な構成要素図

【地形／地割】

・傾斜地 小丘

臥龍院前から続く平坦地は踏分石である伽藍石から緩やかに傾斜し、知止庵の建つ位置が最も高くなっている。

傾斜地と小丘は植栽や石組によって土留めされ、知止庵北側は石段が設けられている。



[写真 3-30] 知止庵地区 傾斜地、小丘

【石／石組】

・石組、景石

石組は知止庵の北西部から北部にかけてあり、小丘の土留めの役割を持つ。知止庵の北側には黒色片岩の石段が設けられ、石段の西側には横長の景石が据えられている。



[写真 3-31] 知止庵地区 石組、景石

【植栽／植生】

・知止庵地区の植栽

飛石の両脇にはカエデ類が植えられ、臥龍の淵側の崖地沿いにはマキとサザンカの生垣を設けている。立地上、霧が多いため、庭園内ではコケの生育状況がよく、ボタンゴケなど珍しいものや多様な種類が見られる。



[写真 3-32] 知止庵地区の植栽

【構造物】

・手水鉢

知止庵地区には手水鉢が2基あり、中門跡の南側と知止庵前に設けられている。

どちらの手水鉢も自然石に、円形の水穴をくり抜いた形状であり、周囲に役石と石燈籠、海を設け、蹲踞空間を成している。



[写真 3-33] 知止庵地区 手水鉢、石燈籠

・石燈籠

知止庵地区には石燈籠が2基あり、どちらも蹲踞の傍に立つ。2基のうち、中門跡の南側は山燈籠、知止庵前には利休型の笠を持つ寄せ燈籠が据えられている。

【建造物】

・知止庵

知止庵は昭和24年（1949）に、河内陽一氏が「浴室便所」を改造し、茶室とした。二畳小間と水屋からなり、平屋建て、一文字瓦葺、壁の腰張りには第3代藩主泰恒の「茶方日記」の反古紙を用いている。庵名の由来は陽明学者中江藤樹の説いた教えにより、入口にかかる「知止」の扁額は第



[写真 3-34] 知止庵地区 知止庵

10代藩主 加藤泰済の筆によるものである。

・中門跡

中門はかつて知止庵の東にあり、現在も踏込石と敷居が残っている。踏込石は延段より15cmほど高く据えられ、敷居も高さがあることから、跨ぐように中門を潜る構造であったと考えられる。また、古図面からは大瓦を用いた曲線状の屋根が掛っていたことが分かる。



〔写真 3-35〕 知止庵地区 中門跡

(3) 不老庵地区

不老庵地区の主要な構成要素を表と図で示し、その中から抜粋した構成要素について述べる。

〔表 3-3〕 不老庵地区の主要な構成要素

指定区分	分類	構成要素	
名勝指定 範囲内	本質的価値を構成する要素	地形／地割	平坦地
		水系	—
		石／石組	石垣、景石、沓脱石、飛石、延段
		植栽／植生	高木類、中木類、低木類、生垣、地被類など
		構造物	石造物：石燈籠、燈籠、飾り井戸、手水鉢、石碑、石樋、 石造物 その他：鬼瓦、鯉瓦
		建造物	不老庵、雪隠跡
	本質的価値に準ずる要素	腰掛	
	庭園の活用及び管理運営のために必要な要素	案内板、解説板、水栓、防災・防犯設備、侵入防止柵、傘立て	

【地形／地割】

・平坦地

知止庵地区の傾斜地は、知止庵への飛石の分岐点からまた平坦地となり、不老庵まで広がる。

平坦地の中央には南北に長く、緩く曲線を描いて飛石が続き、その両脇に植栽帯や構造物が配置されている。南端は石垣から張り出して不老庵が建つ。

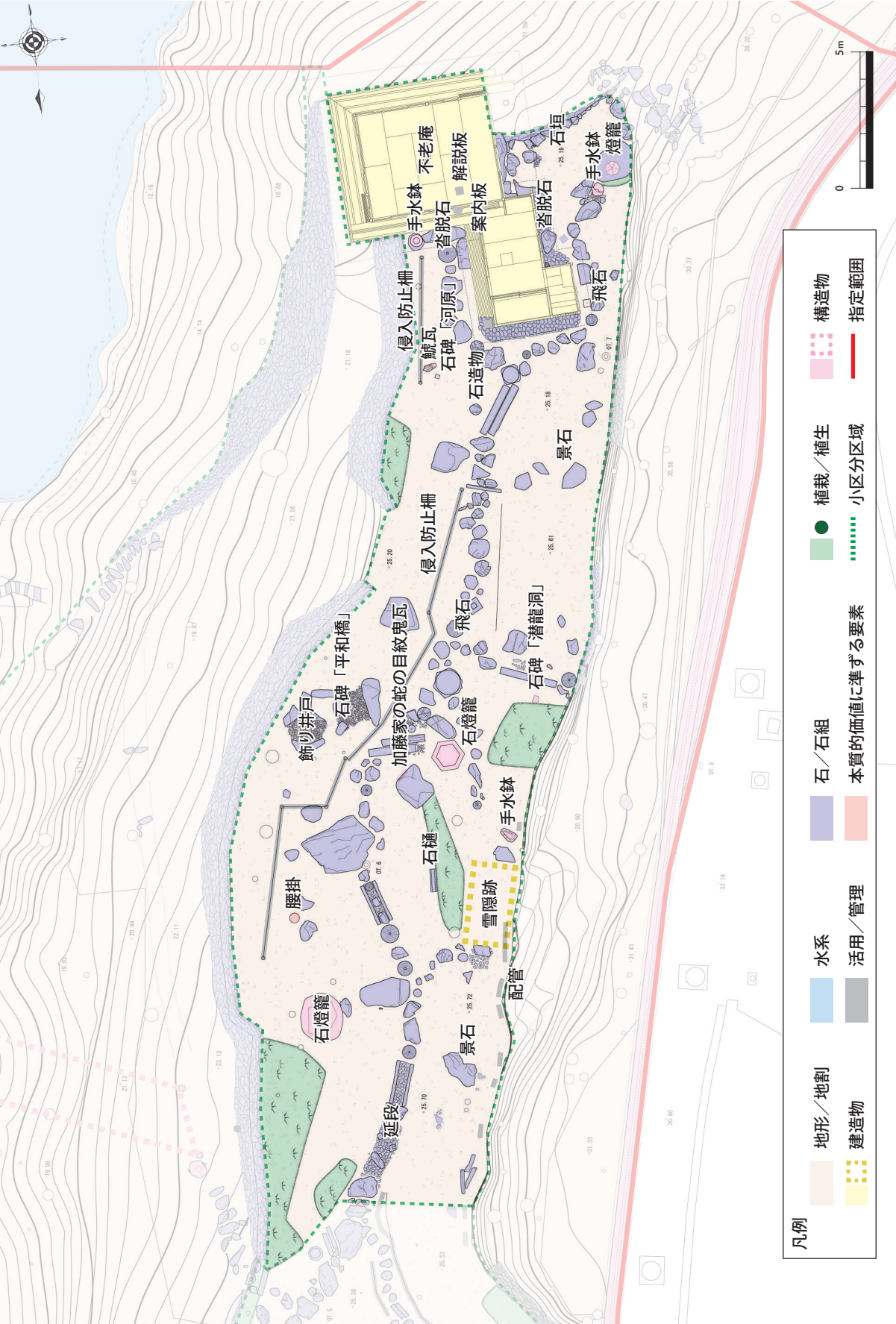
【石／石組】

・景石

飛石の東西や東側崖地付近の要所に、大



〔写真 3-36〕 不老庵地区 平坦地



〔図3-4〕不老庵地区の主要な構成要素図

振りの景石が据えられている。石質は花崗岩や輝緑岩など様々な種類が用いられている。

【植栽／植生】

・不老庵地区の植栽

高木はカエデ類、サルスベリなどがあり、東側の崖沿いにはマキ、コウヨウザン、クスの大木があり、臥龍の淵へ大きく生長している。低木はサツキ、地被類はコケを中心に、ヒトツバなどが添えられている。



〔写真 3-37〕 不老庵地区 飛石、景石

【構造物】

・石燈籠

石燈籠は山燈籠と春日燈籠の2基が据えられている。山燈籠は不老庵地区北部の臥龍の淵側にあり、高さ約3mの春日燈籠は不老庵地区の中央部にある。また、不老庵西側の景石上の燈籠は鉄製である。



〔写真 3-38〕 不老庵地区 山燈籠

・石碑

「河源」と刻銘された石碑は、不老庵の北側に立つ。大洲三筆と称された仁井三魚によるもので、この石碑はかつて藩主の御茶屋であった場所（大洲市五郎）から移設したものとされる。

石碑の隣には鯪瓦が据えられている。



〔写真 3-39〕 不老庵地区 石碑、鯪瓦

【建造物】

・不老庵

不老庵は木造平屋建て、座敷の半分を張り出した懸造としており、約5mの高さを皮付き檜柱が支えている。屋根は寄棟造であり、茅葺、一部瓦葺である。平面は北に三畳小間の茶室と、肱川に面した開放的な広間からなる。座敷の外縁は北、東、南の3方向に廻り、名栗の高欄がついている。南西隅は外縁が長く伸び、生きたマキを捨て柱として用いるなど、自然感を活かした意匠が見られる。



〔写真 3-40〕 不老庵地区 不老庵（内部）

・雪隠跡

雪隠跡は不老庵地区北部の平坦地であり、平成初期頃までは雪隠（便所）が設置されていた場所である。

臥龍院と不老庵を繋ぐ南北の飛石が石燈籠の東側で分岐して雪隠跡の方へ延び、また崖際に手水鉢が据えられている。これらは雪隠に付随する構成要素であったと考えられる。



〔写真 3-41〕 不老庵地区 雪隠跡

（４）崖地

崖地の主要な構成要素を表と図で示し、その中から抜粋した構成要素について述べる。

〔表 3-4〕 崖地の主要な構成要素

指定区分	分類	構成要素	
名勝指定 範囲内	本質的価値を構成する要素	地形／地割	崖地、古道、横井戸
		水系	—
		石／石組	石垣、石積、石組
		植栽／植生	高木類、中木類、低木類、地被類など
		構造物	石造物：石燈籠 垣 根：土塀 その他：潜龍洞
		建造物	—
	庭園の活用及び管理運営のために必要な要素	石垣（整備）	

【地形／地割】

・崖地

崖地は敷地西側に聳え、臥龍院前の井戸から不老庵に到るまでの広範囲を占める。切り立った崖であり、岩盤が露出する箇所もある。知止庵と不老庵の中間部には、岩盤を石段に加工した古道も残されている。

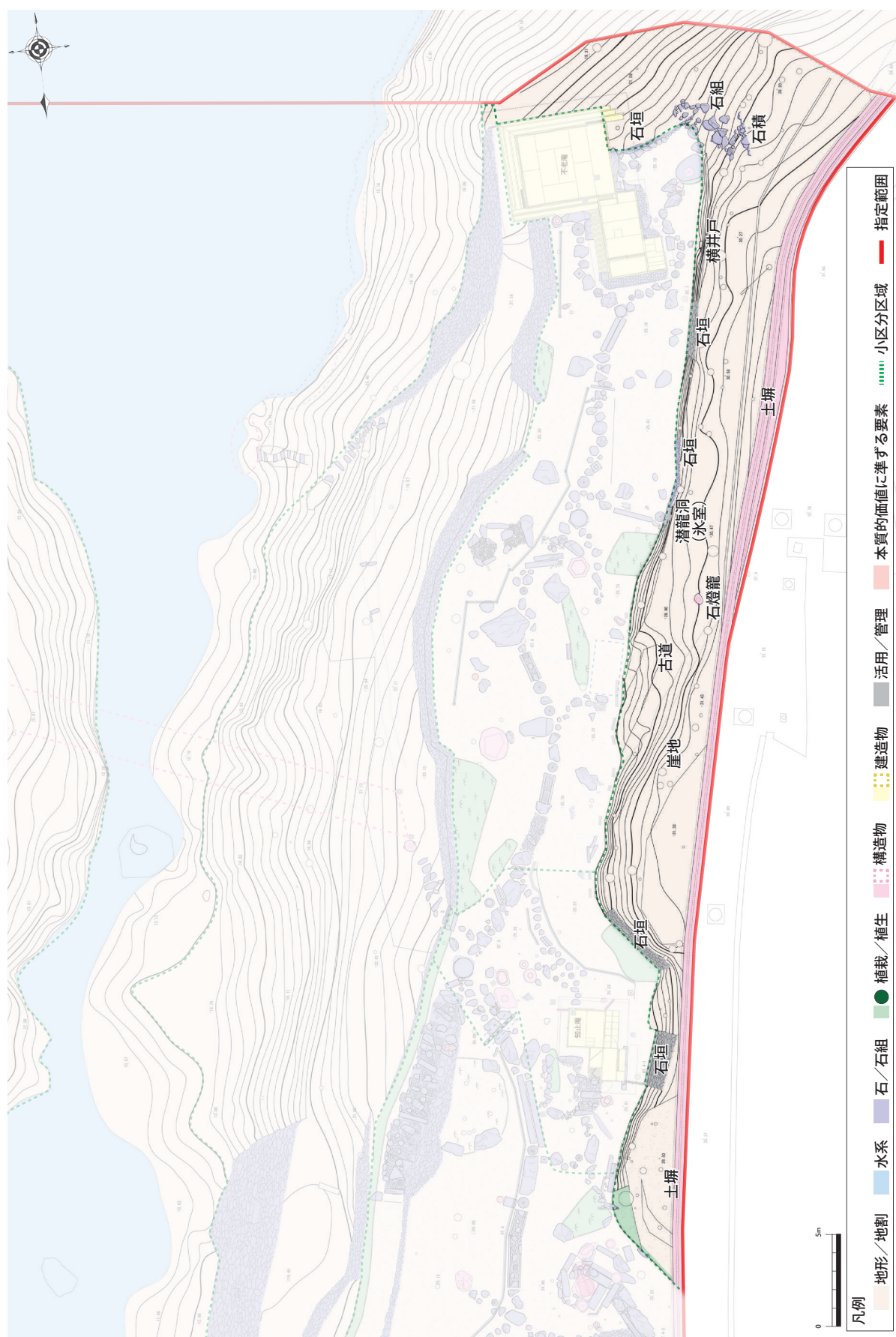
不老庵の北西や西部には、岩窟を利用した水室や横井戸などがある。

・横井戸

不老庵北側の庭園に面する崖地には、岩盤を掘って造った横井戸がある。かつて岩盤からは湧水で満たされていたと伝わりますが、現在は枯れ、雨水が溜まっている。



〔写真 3-42〕 崖地 崖地、古道



〔図 3-5〕 崖地の主要な構成要素図

【植栽／植生】

・崖地の植生

崖地上にはシラカシ、クロガネモチなどの高木が占め、カエデ類は主庭へ張り出すように生えている。樹根は岩盤を這うように延び、主庭内まで延ばす樹木も見られる。中低木にはツバキ類などがあり、高木の足元にはササやシダ類が見られる。



[写真 3-43] 崖地 横井戸

【石／石組】

・石垣

知止庵と不老庵付近には石垣が築かれている。そのほとんどが、昭和期以降に崩落した崖地の修理や危険性から石垣で補強されたものである。ただし、潜龍洞周辺の石垣は平成9～10年頃に修理されたが、一部矢羽積の部分は古い時期のものと思われる。



[写真 3-44] 崖地の植生

・石組

崖地の南部にあり、岩盤の端部を利用して石組がなされている。石組は滝石組の様に段状に組まれ、海蝕の石や段状に折れ曲がった石など意匠性のある石が用いられている。また、石組の下部に土管が埋設されていることから、かつては降雨時に水が流れていたと考えられる。



[写真 3-45] 崖地 潜龍洞、石垣

【構造物】

・潜龍洞

潜龍洞は不老庵の北西にあり、岩盤を掘って造った氷室である。木製の扉がつき、内部は石柱と石で補強されている。

潜龍洞前には「潜龍洞」の石碑があり、刻銘は中国人の能筆家によるものとされ、「藤雲橋」の銘と同筆と伝わる。

・石燈籠

石燈籠は崖地の古道脇に据えられた、げんだ石製のがん付き柱形燈籠である。



[写真 3-46] 崖地 石燈籠

第2項 臥龍の淵

臥龍の淵の主要な構成要素を表と図で示し、その中から抜粋した構成要素について、河川部、崖地及び石垣の小区分に分けて述べる。

[表 3-5] 臥龍の淵の主要な構成要素

指定区分	分類	構成要素	
名勝指定 範囲内	本質的価値を構成する要素	地形／地割	自然露岩、崖地、臥龍の淵、園路、通路
		水系	肱川
		石／石組	石垣、石段
		植栽／植生	高木類、中木類、低木類など
		構造物	石造物：石燈籠、門燈、藤雲橋の親柱 その他：藤雲橋跡、舟着場跡
		建造物	—
	本質的価値に準ずる要素	石垣（整備）、渡河橋	
	庭園の活用及び管理運営のために必要な要素	排水路、案内板、手摺、擬木柵、階段、護岸	

(1) 河川部

【地形／地割】

・臥龍の淵

臥龍の淵は河川護岸と蓬莱山の間を流れる肱川を指し、東西を切り立った崖に囲まれる。臥龍の淵の流れは岩盤が入り組み、深い淵の景をつくり、主庭からの眺望景観となっている。



[写真 3-47] 河川部 臥龍の淵

【植栽／植生】

・河川部の植生

岩盤には下草やコケが見られるが、南部の不老庵付近ではマキ、カエデ類、タケが見られる。明治大正期の絵葉書などには河川部に樹木はなく、実生木の生長やタケの繁茂により、地形を覆い隠している。

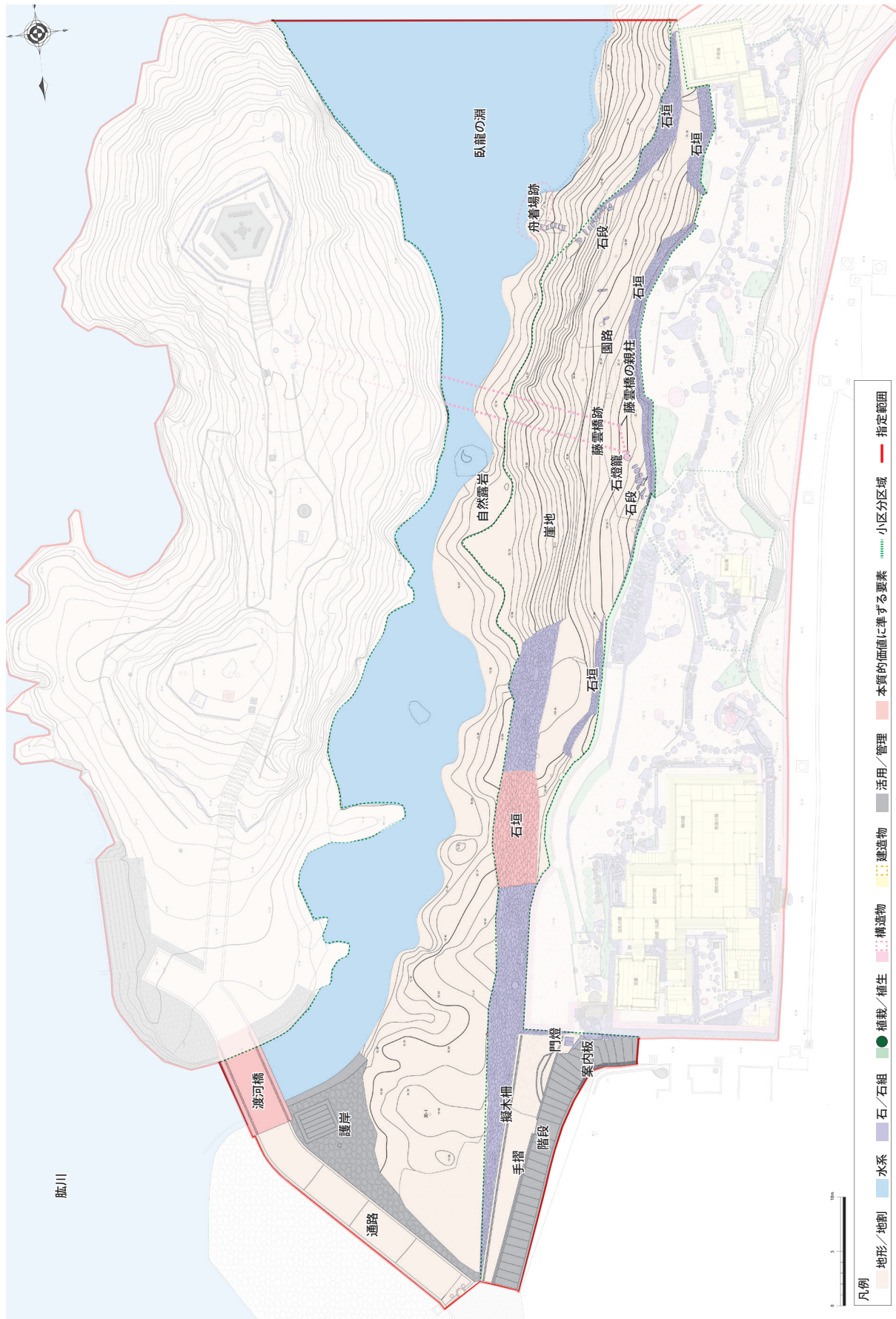
【構造物】

・舟着場跡

舟着場跡は臥龍の淵の水面近くの護岸に設けられている。崖地から続く園路には、岩盤を加工して造られた石段があり、水際まで下りられるようになっている。その最



[写真 3-48] 河川部 舟着場跡



〔図 3-6〕 臥龍の淵の主要な構成要素図

下段に平場があり、舟着場として利用されていたと考えられる。

(2) 崖地及び石垣

【地形／地割】

・園路

園路は崖地上にあり、主庭を支える石垣の裾部に設けられている。園路は舟着場の石段から延び、藤雲橋の親柱を経て知止庵の南東部から主庭へ到る。



〔写真 3-49〕 崖地及び石垣 園路、石段

【石／石組】

・石垣

石垣は岩盤上に築かれ、高さ約 10m の石垣や鉢巻状の石垣を 1 段から 2 段設け、地形に合わせて曲線を描く。北側の石垣には自生する高木をそのまま取り込んで築いた箇所があり、現在は樹木が枯損して失われたところが石室となっている。



〔写真 3-50〕 崖地及び石垣 石垣

石垣の一部、石材の色が異なる範囲は、昭和 60 年（1985）の復旧工事で新たに築かれたものであり、幅 13m、高さ 11 m の石垣を施工したものである。



〔写真 3-51〕 崖地及び石垣の植生

【植栽／植生】

・崖地及び石垣の植生

崖地部分にはカエデ類やコウヨウザン、ヤブツバキなどが見られ、シダ類などの下草が繁茂している。

また北部では、エノキやカエデ類が石垣に取り込まれている。

【構造物】

・門燈

門燈（燈籠）は正門前にあり、げんだ石を用いて造られ、木製の屋根が掛かる。この意匠は、中野家資料に図案が残っている。

同じ意匠の門燈が、本庭園から西側に約 50 m 離れた名勝範囲外にも 1 基見られるが、関係性は不明である。



〔写真 3-52〕 崖地及び石垣 門燈

【庭園の活用及び管理運営のために必要な要素】

渡河橋

渡河橋は蓬莱山へ渡るために、臥龍の淵が肱川に合流する手前に架けられたコンクリート製の橋である。江戸時代の絵図では同位置に石の反橋が描かれており、昭和55年（1980）の古写真にはやや反りの付いた木製または擬木製の橋が架かっている。

その後、平成19年（2007）に平坦な擬木橋に架け替えられ、平成26年（2014）には流木やゴミなどの流下阻害を解消するため、現在のコンクリート橋に架け替えられた。



[写真 3-53] 崖地及び石垣 渡河橋

第3項 蓬莱山

蓬莱山の主要な構成要素を表と図で示し、その中から抜粋した構成要素について述べる。

[表 3-6] 蓬莱山の主要な構成要素

指定区分	分類	構成要素	
名勝指定 範囲内	本質的価値を構成する要素	地形／地割	島（蓬莱山）、崖地、園路
		水系	肱川
		石／石組	石垣
		植栽／植生	高木類、中木類、低木類、草本類など
		構造物	石造物：石燈籠、藤雲橋の親柱、手水鉢、石室 その他：藤雲橋跡
		建造物	与楽亭跡
	本質的価値に準ずる要素	渡河橋、舳い杭	
	庭園の活用及び管理運営のために必要な要素	擬木柵、擬木階段、東屋、水飲場、照明、石碑、ベンチ、舟着場、護岸	

【地形／地割】

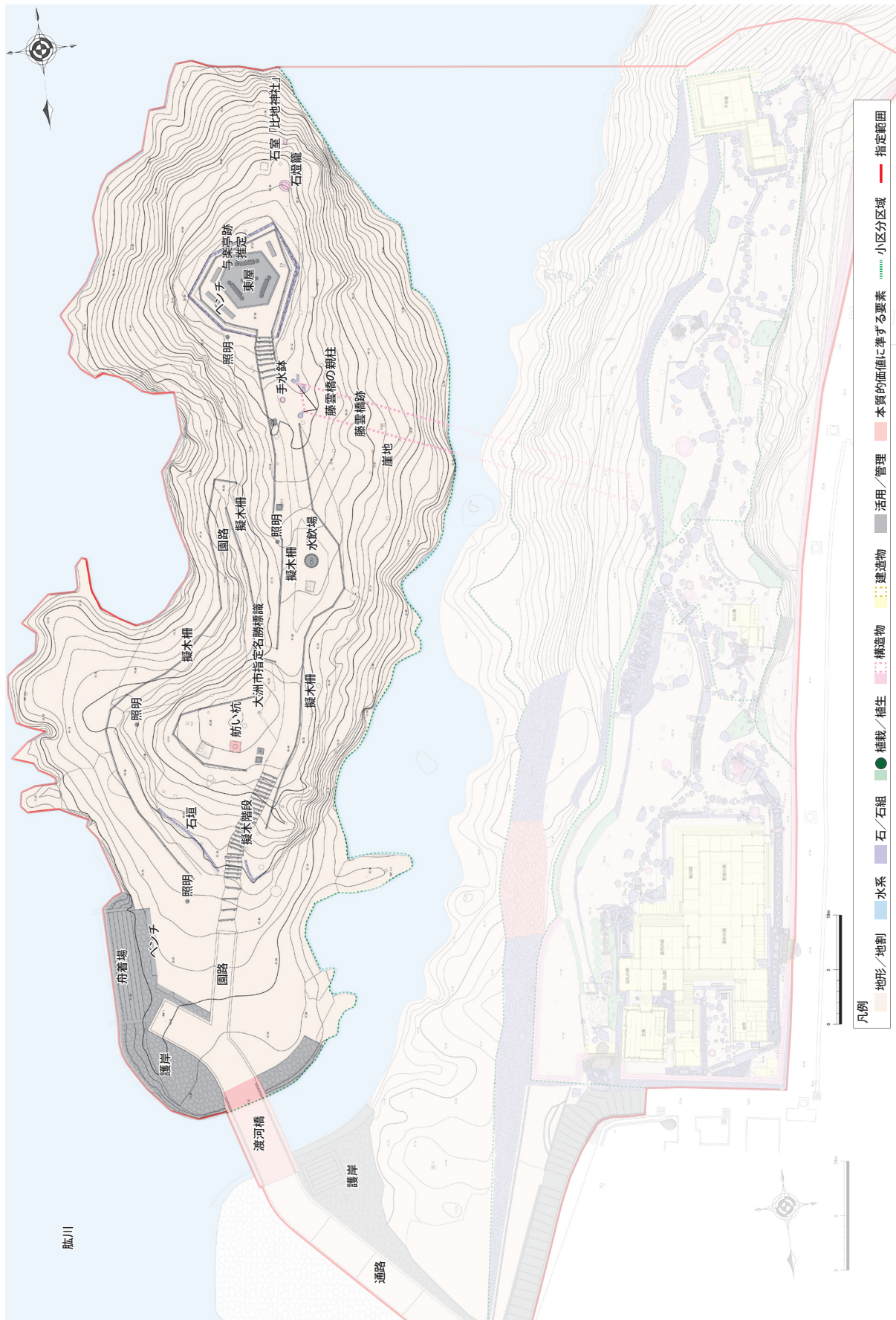
・島（蓬莱山）

蓬莱山は2つの高みを持ち、南北に長い島である。島の東側中央部が窪み、入江となっている。また、尾根筋に沿って園路が設けられ、途中で東部に分岐し、島の地形に沿って回遊できるようになっている。

島の母岩は主庭側の崖地と同じ泥質片岩である。南の頂部から南端にかけてはチャートを含み、硬いチャート部分が露頭している。



[写真 3-54] 蓬莱山 島（蓬莱山）



〔図 3-7〕 蓬莱山の主要な構成要素図

【植栽／植生】

・蓬萊山の植生

蓬萊山は、アラカンやクロガネモチ、ツブラジイなどの常緑広葉樹が目立つ。そのほか、蓬萊山の北端にはヒノキ、中央にヤマザクラが見られる。

明治大正期の蓬萊山はアカマツの疎林であったが、現在は南端にゴヨウマツなどのマツ類が数本見られるのみとなり、常緑広葉樹が主体の林となっている。また、樹木が全体的に高木化している。



[写真 3-55] 蓬萊山 植生

【石／石組】

・石垣

石垣は蓬萊山の登り口にあり、小振りの石を用いて築かれている。これは「伊豫國大洲町市街圖」に描かれている門の横の石垣と思われる。



[写真 3-56] 蓬萊山 石垣

【構造物】

・藤雲橋の親柱

島の北側に「藤雲橋」と刻銘のある親柱が立つ。かつて臥龍の淵の上には、主庭と蓬萊山に橋がかかっており、この橋は人が渡るものではなく、ワイヤーを掛けて藤を這わせていた。「藤雲」は紫雲に通じていると考えられ、蓬萊山と合わせて神仙思想の表現がなされていたと思われる。

現在は親柱のみが残り、同様に、主庭側の崖地及び石垣にも親柱が2本残る。対岸の親柱にはワイヤーの残欠が見られる。



[写真 3-57] 蓬萊山 藤雲橋の親柱（蓬萊山側）

【庭園の活用及び管理運営のために必要な要素】

・舟着場

舟着場は蓬萊山の北側に整備されており、石段状の護岸が設けられている。

蓬萊山周辺には江戸時代より臥龍山渡しがあり、近年ではこれを模した「臥龍の渡し」を行い、臥龍山荘周辺を周遊する屋形船の着岸場所として利用されている。



[写真 3-58] 蓬萊山 舟着場

第4項 眺望

眺望は広範囲、多岐にわたる要素で成立しており、前項でまとめた構成要素とは性質が異なるため、本項にて整理する。

本庭園は東に肱川や富士山、根太山、梁瀬山、如法寺河原、河内寅次郎の墓所、南には亀山を望む立地にあり、園内の様々な場所から望むことができる。主庭は南北に長いことから、場所によって眺望が変化し、北側では蓬莱山や臥龍の淵、南側では肱川や山々を望むことができる。



〔写真 3-59〕 富士山



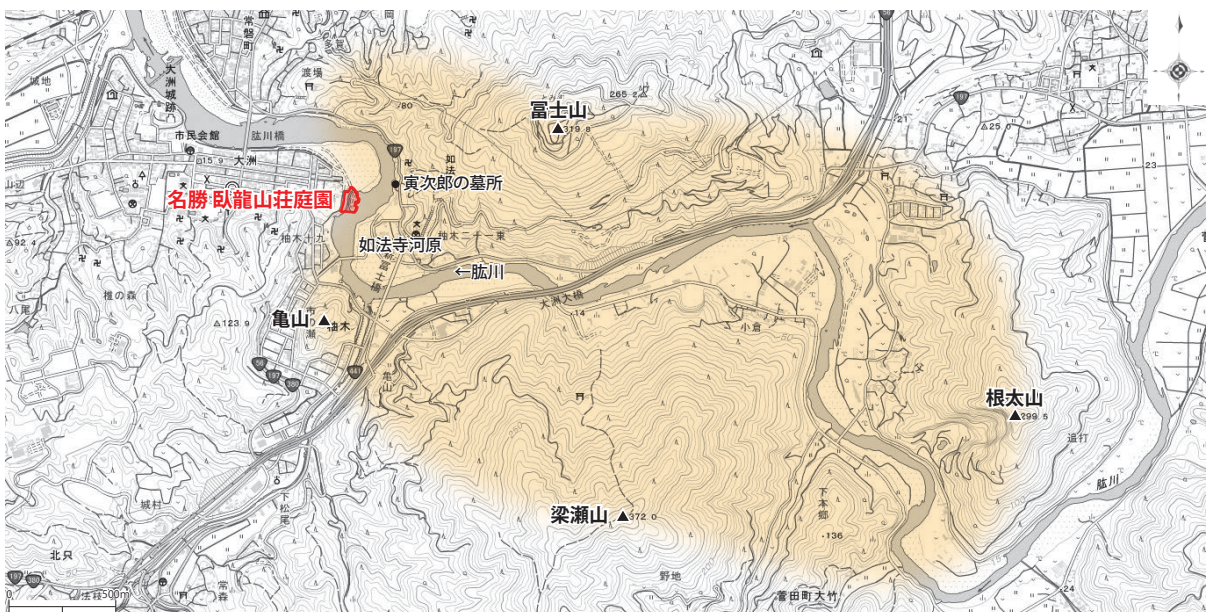
〔写真 3-60〕 梁瀬山



〔写真 3-61〕 亀山



〔写真 3-62〕 河内寅次郎の墓所



〔図 3-8〕 庭園と眺望の位置関係図（地理院地図に加筆）

第4章 現状と課題

本章では本庭園の現状を把握するとともに、今後の整備に向けて現状と課題を整理する。

課題は本庭園の保存管理における課題、公開活用における課題、管理及び運営体制における課題の3項目に分類した。

第1節 保存管理における現状と課題

第1項 保存管理の現状

本庭園は河内寅次郎が亡くなった後、一族親戚が居住管理してきたが、昭和53年（1978）の寄付によって、所有者として本市が管理を行っている。庭園の管理については、文化財庭園保存技術を有する市内の造園業者に年間の植栽管理業務を委託し、建造物や施設設備については、指定管理者団体に管理業務を委託している（第3節にて詳述）。

第2項 保存管理における課題

保存管理における課題については、本質的価値を構成する要素及び本質的価値に準ずる要素を対象とし、地区区分ごとに取りまとめる。

（1）主庭

各所で表土流出や地被類衰退箇所の排水不良が生じており、表面排水の処理が必要である。

また、崖地の岩盤が風化しているため、過度の変化が生じないか経過観察が必要であり、そのうえで繁茂した高木類の枯枝除去など適切な管理が求められる。

①臥龍院地区

【地形／地割】

・表土流出、排水不良

表土流出や地被類衰退箇所に雨水が滞水し、排水不良が生じている。

【石／石組】

・景石の傾倒

景石が傾倒し、天端が傾いている。

・石垣の空洞化

庭園の敷地を支える石垣に空洞化や弛みが見られる。

【植栽／植生】

・支障木や危険木

構造物に接近する支障木、高木に枯枝が目立つ危険木や樹勢が衰退した樹木が見られる。

・地被類の衰退

踏圧などにより、飛石や延段周辺の地被類が衰退している。



〔写真 4-1〕排水不良、地被類の衰退の状況



〔写真 4-2〕石燈籠への支障木

【構造物】

・「路次門」の損傷

「路次門」の竹材が劣化し、支柱が不安定となるなど損傷が見られる。

・石燈籠の消失

古写真に写る石燈籠が消失している。

【建造物】

・正門の損傷

表門の瓦の劣化、木部が腐朽するなどの損傷が見られる。

【本質的価値に準ずる要素】

・擬木柵の損傷

コンクリート製擬木柵が傾倒するなどの損傷が見られる。

②知止庵地区

【地形／地割】

・表土流出、排水不良

表土流出や地被類衰退箇所雨水が滞水し、排水不良が生じている。

【植栽／植生】

・地被類の衰退

踏圧などにより、飛石や延段周辺の地被類が衰退している。

【構造物】

・石燈籠の消失

古写真に写る石燈籠が消失し、台座のみが残る。

【建造物】

・中門の消失

中門が消失し、現在は踏込石と敷居のみが残るものの、空間の切り替わりが不明瞭となっている。



〔写真 4-3〕「路次門」の損傷の状況



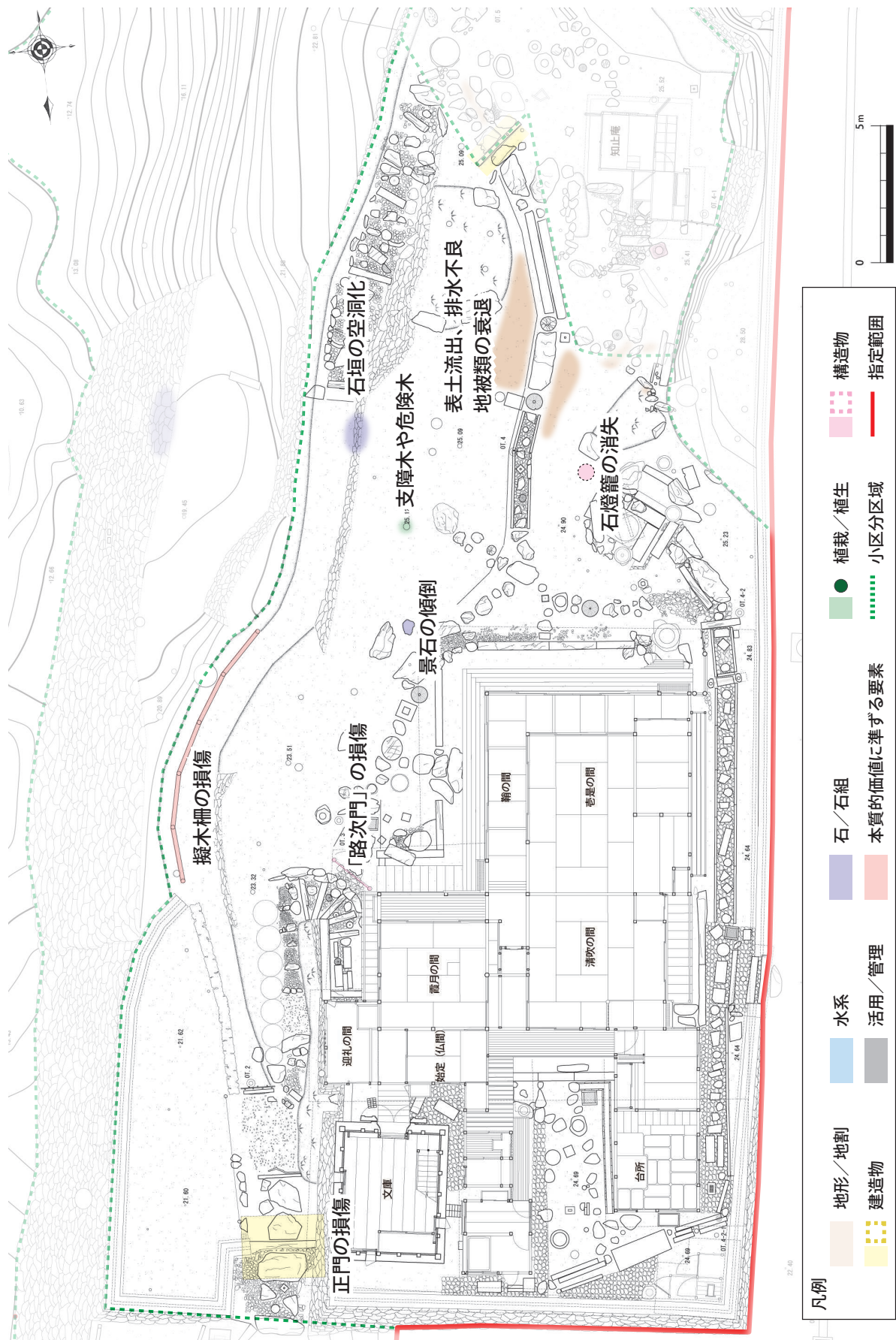
〔写真 4-4〕正門の損傷の状況



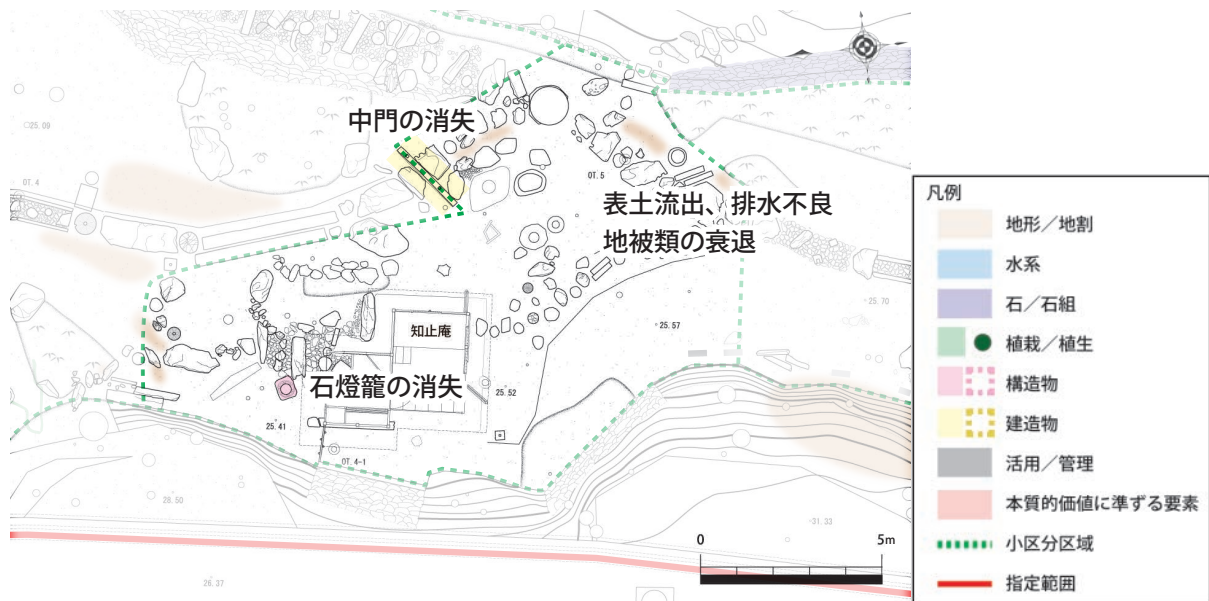
〔写真 4-5〕擬木柵の損傷の状況



〔写真 4-6〕石燈籠の消失



〔図 4-1〕 臥龍院地区における主要な課題位置図



〔図 4-2〕 知止庵地区における主要な課題位置図

③不老庵地区

【地形／地割】

・表土流出、排水不良

表土流出や地被類衰退箇所雨水が滞水し、排水不良が生じている。

・ごろた石の消失

飾り井戸から飛石を越えて景石付近まで、白いごろた石が敷かれているが、飛石周囲のごろた石が減少している。



〔写真 4-7〕 ごろた石の消失

【石／石組】

・延段の不陸

延段の一部が不陸し、延段の高さが不均一になっている。

・飛石の不陸

飛石が不陸し、天端が大きく傾いている。

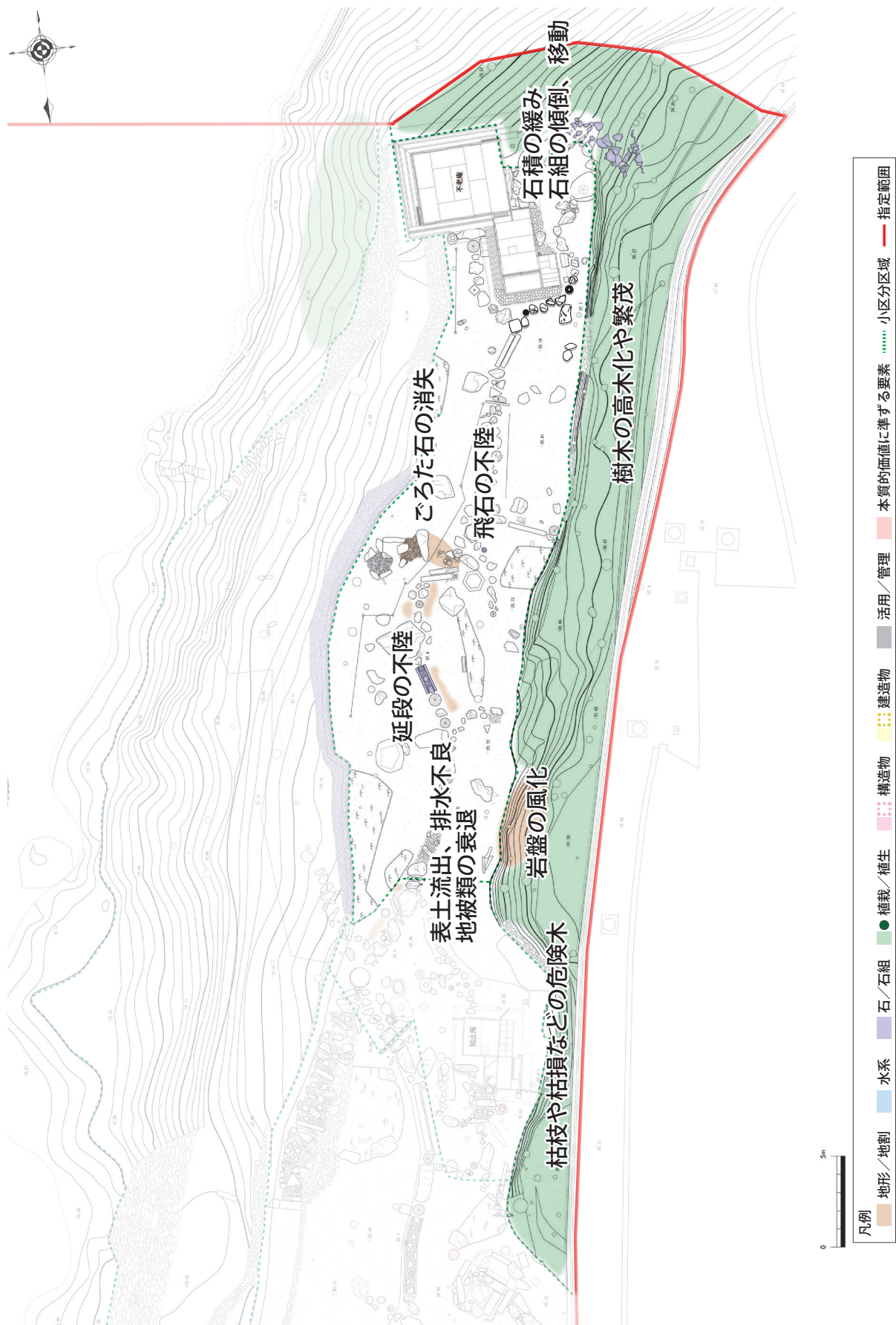


〔写真 4-8〕 延段の不陸

【植栽／植生】

・地被類の衰退

踏圧などにより、飛石や延段周辺の地被類が衰退している。



[図 4-3] 不老庵地区、崖地における主要な課題位置図

④崖地

【地形／地割】

- ・岩盤の風化

崖地の岩盤（泥質片岩）が風化し、崖崩れなどの恐れがある。

【石／石組】

- ・石積の緩み

崖地の石積に、裏込めの流出などによる緩みやはらみが見られる。

- ・石組の傾倒、移動

崖地の石組に、表土の流出などによる石の傾倒や移動が見られる。

【植栽／植生】

- ・枯枝や枯損などの危険木

高木に枯枝が目立つ危険木や樹勢が衰退した樹木が見られる。

- ・樹木の高木化や繁茂

崖地の樹木が高木化し、倒木や崩落の恐れがある。また、樹木の繁茂によって地形が不明瞭となっている



〔写真 4-9〕 崖地の岩盤風化の状況



〔写真 4-10〕 崖地樹木の高木化の状況

（2）臥龍の淵

豪雨後の土砂、流木竹及びゴミが臥龍の淵に堆積することが景観上の大きな課題である。また、樹木や竹林の繁茂による眺望阻害や地形が不明瞭となっており、安全性に留意して定期的な管理が求められる。添景であった藤雲橋が消失しているため、庭園の空間性を回復する復元を検討する必要がある。

①河川部

【地形／地割】

- ・舟着場跡及び崖地の土砂堆積

舟着場跡及び臥龍の淵の崖地に土砂が堆積し、地形が不明瞭になっている。

【水系】

- ・流木竹やゴミの堆積

肱川の上流部から流れてくる流木竹やゴミなどが臥龍の淵や蓬萊山への渡河橋周辺に堆積し、景観を損ねている。国交省及び大洲市によって年数回程度、堆積ゴミが撤



〔写真 4-11〕 土砂堆積の状況

去されるが、これを上回る量が流入している。

②崖地及び石垣

【石／石組】

・石垣の損傷

藤雲橋跡付近の石垣に、樹木枯損後の空洞を令和2年（2020）に応急修理したが、将来的に周辺の石垣の弛みなども含めて修理が必要である。



〔写真 4-12〕 流木竹やゴミ堆積の状況

【植栽／植生】

・樹木の高木化や繁茂

崖地の樹木が高木化し、倒木や崩落の恐れがある。また、樹木の繁茂によって周辺環境への眺望障害や地形が不明瞭となっている。

・竹林の繁茂

竹林が繁茂し、地形が不明瞭となっている。



〔写真 4-13〕 石垣の損傷の状況（平成30年撮影）

【構造物】

・藤雲橋の消失

藤雲橋の親柱のみが残り、かつての臥龍の淵の添景が失われている。



〔写真 4-14〕 樹木や竹林の繁茂の状況



〔写真 4-15〕 藤雲橋跡



〔史料 4-1〕 藤雲橋の架線
（古写真部分拡大 大正2年～昭和5年）

(3) 蓬莱山

豪雨後の土砂、流木竹及びゴミが臥龍の淵に堆積することが景観上の大きな課題である。また、樹木や竹林の繁茂による眺望阻害や地形が不明瞭となっており、安全性に留意して定期的な管理が求められる。表土が流出した擬木階段などは、都市計画緑地の園路として危険がないように修繕が必要である。

【地形／地割】

・表土流出

擬木階段や園路の表土が流出し、配管が露出している。

・護岸の土砂堆積

渡河橋付近の護岸に土砂などが堆積し、地形が不明瞭になっている。



〔写真 4-16〕 表土流出の状況

【植栽／植生】

・樹木の高木化や繁茂

樹木の高木化や繁茂によって周辺環境への眺望阻害や地形が不明瞭となっている。



〔写真 4-17〕 表土流出による配管露出の状況

【建造物】

・与楽亭の消失

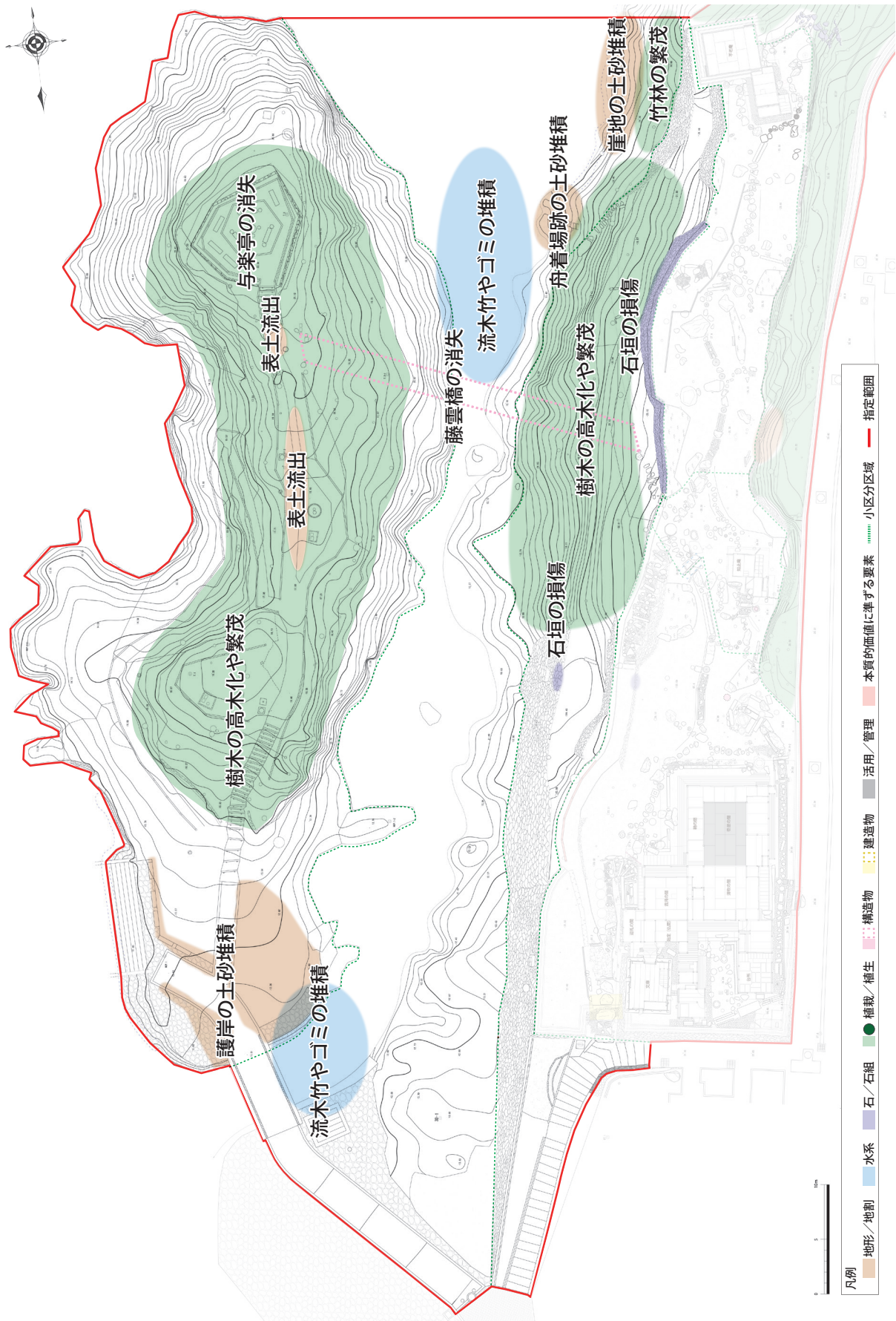
絵図や絵葉書などに見られる与楽亭が消失し、空間の利用が変化している。



〔写真 4-18〕 護岸の流木竹や土砂堆積の状況



〔写真 4-19〕 土砂堆積の状況



〔図 4-4〕 臥龍の淵、蓬萊山における主要な課題位置図

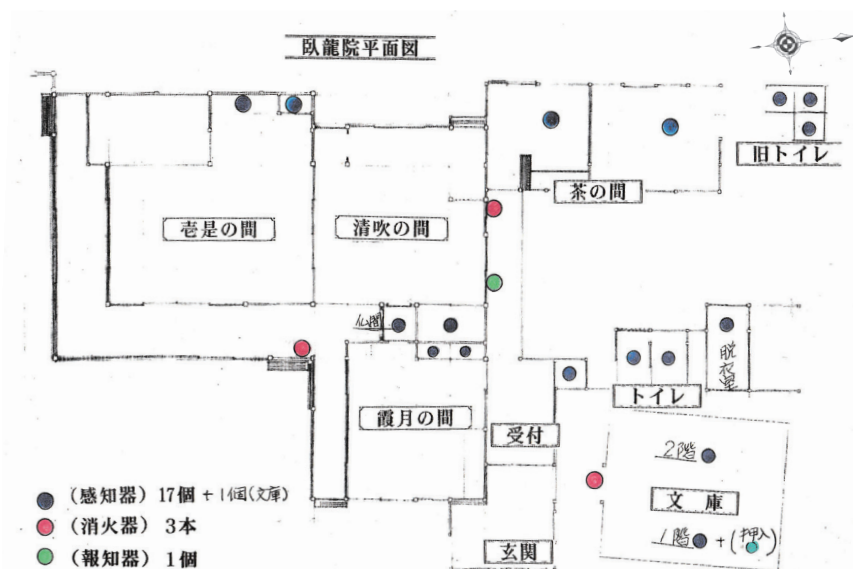
第3項 防災及び防犯の現状

(1) 防災対策の現状

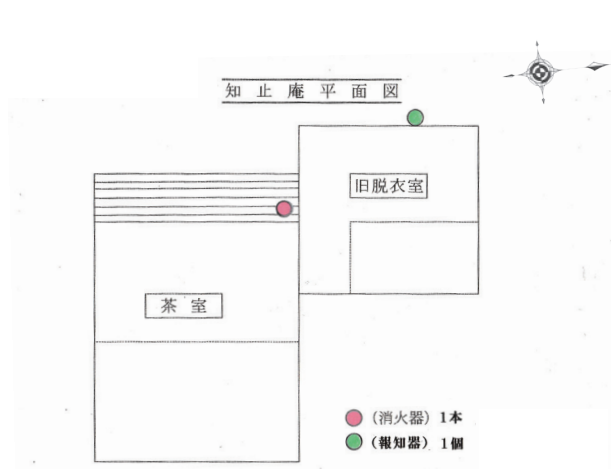
本庭園は肱川左岸の崖地に立地し、肱川が洪水被害を受けやすい地形であることから、治水事業までは水害が絶えなかった。昭和期に堤防を造る河川事業やダム建設、砂防事業を行っている。近年では、平成30年(2018)7月に平成以降最大規模の被害を受け、本庭園でも蓬萊山や臥龍の淵の崖地沿いの石垣や手摺、石段に被害が及んだ。令和元年度より「直轄河川激甚災害対策特別緊急事業」によって緊急治水対策を実施し、対岸となる如法寺河原付近の堤防嵩上げ工事が開始された。

庭園の建造物の防火対策では、敷地内は火気厳禁とし、自動火災報知器及び消火器を各建造物内に設置している(図4-5～7)。本庭園の最寄りの消防署は大洲消防署(到着時間 約2分)であり、消防隊員とともに消火及び避難訓練を年2回実施している。また、災害発生時に管理者が観覧者を誘導できるよう、避難経路図を共有している。

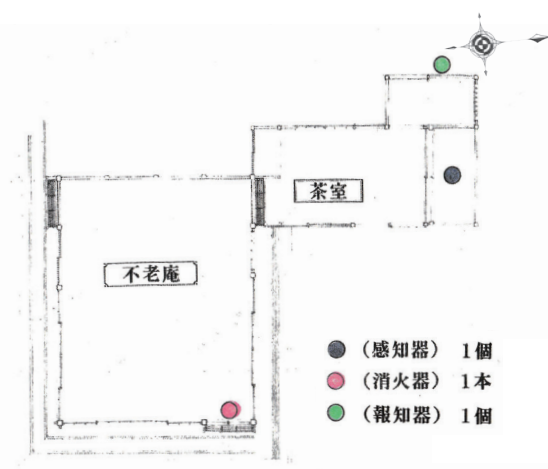
開館中には庭園及び建造物内の定期的な見回りを行い、異変への早期対応ができるように対策を行っている。



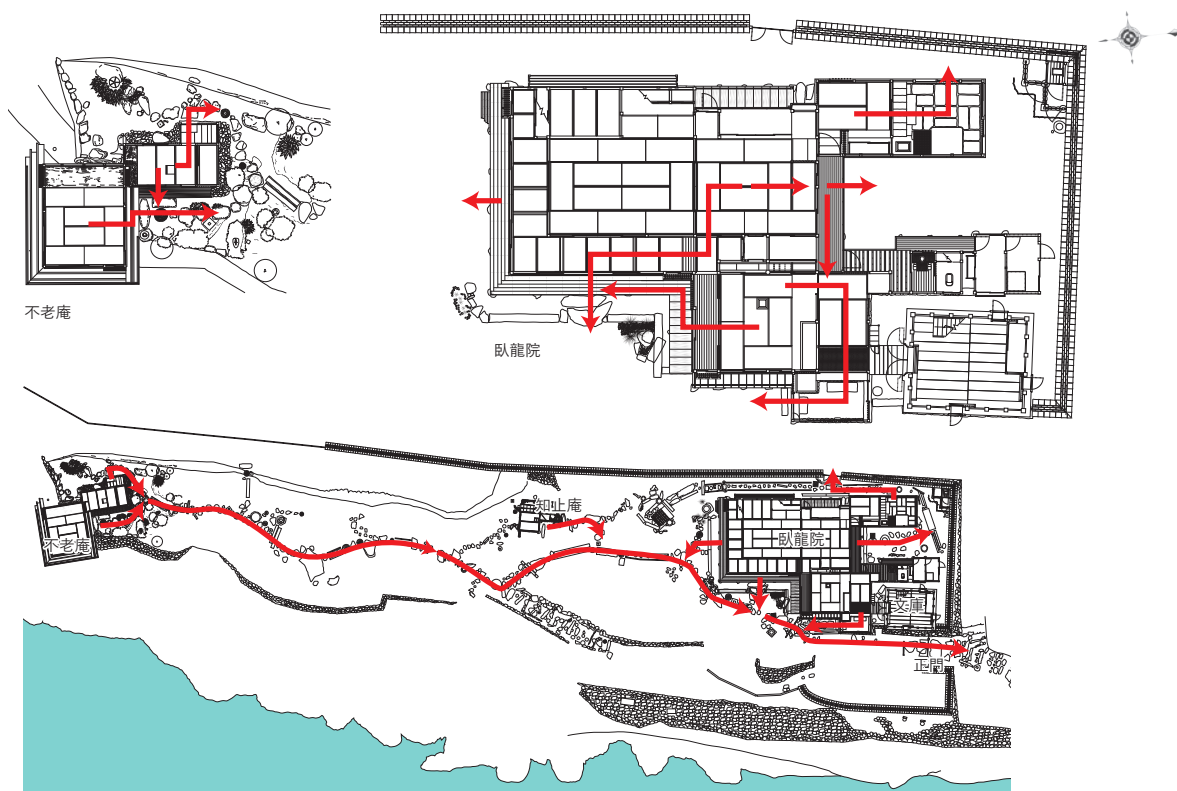
[図4-5] 消防設備配置図(臥龍院、文庫)



[図4-6] 消防設備配置図(知止庵)



[図4-7] 消防設備配置図(不老庵)



[図 4-8] 避難経路図（主庭）

（２）防犯対策の現状

近年においては特に大きな犯罪や事故は起きていない。臥龍山荘開館時は臥龍院の受付に職員が常駐し対応しているが、閉館時は不在となるため機械警備を実施している。現状の防犯対策は施錠の徹底のほか、主庭の範囲全域に対して防犯カメラ付きのセンサーを設置し、24時間の機械警備を行っている。

第4項 防災及び防犯の課題

（１）防災対策の課題

本庭園で災害によって発生する可能性のある被害として、次のようなものが想定される。

台風、豪雨：崖地の崩壊、石垣の弛みや崩れ、倒木、枯枝などの落下や飛散、建造物及び構造物の破損、浸水、臥龍の淵の流木、土砂堆積など

洪水：浸水、建造物及び構造物の破損、倒木など

地震：石組や石垣の弛みや崩れ、建造物及び構造物の倒壊、倒木、地割れ、土砂崩れ、液状化など

落雷：建造物や樹木の損傷、火災など

人災：放火による建造物や樹木の火災、接触による建造物や構造物の破損など

崖地の高木が倒木した場合、建造物への影響も考えられることから、適切な植栽管理を行い、危険木の対処をしておく必要がある。火災については、本庭園の文化財建造物はすべて木造であり、文庫は土蔵であるが軸組や小屋組は全て木造であるため、延焼しやすい。そのため、消火設備の検討も急務である。

現状の避難経路では、階段の少ない経路である管理者用の見切り垣（庭門）から勝手門への経

路が含まれておらず、さらに臥龍院内からは沓脱石のない南側の縁から外へ出るようになっている。そのため、実際の誘導を想定した安全な経路、かつ速やかに避難できるよう見直しが必要である。

(2) 防犯対策の課題

庭園及び建造物内の見回りを行い、問題が生じた際には本市への連絡体制を取っているが、観覧者の多い時期には、巡回の頻度を増やすなど改善が必要である。今後も管理者や関係者間で情報共有を行うことで、異変の早期把握に努める。

第2節 公開活用における現状と課題

第1項 公開活用の現状

(1) 公開活用

本庭園は本市の所有となって以降、昭和55年(1980)に一般公開を開始した。平成22年(2010)からは、指定管理者制度を採用し、指定管理者団体による運営及び公開を開始した。

公開は通年で、観覧時間は午前9時から午後5時まで(札止は午後4時30分)としている。観覧の受付は臥龍院内で対応し、パンフレットの配布、絵葉書などの販売も実施している。また、4月～10月(8月除く)の期間は毎週日曜日に不老庵にて呈茶を提供している。

公開範囲は名勝指定範囲内のほぼ全域としており、主庭の範囲が有料観覧エリアとなっている。建造物については、文庫内部及び臥龍院内部の一部や不老庵附属の茶室は非公開としており、知止庵内部は公開しているものの、立入禁止としている。なお、明確な規定はないものの20名を目安として、観覧者の人数を臥龍院内と主庭内に振り分けて誘導している。

蓬萊山は都市計画緑地(肱川緑地)として整備されており、本庭園の観覧者以外にも散策可能であり、鶴飼いやお舟めぐり(肱川周遊の屋形船)の乗船場にもなっている。お舟めぐりは、大洲城、盤泉荘、臥龍山荘の共通観覧券とのセット券もあり、屋形船で巡ることができる(令和5年(2023)1月現在)。

[施設情報]

観 覧 料	大人	550 円
	中学生以下	220 円
大洲城、臥龍山荘共通観覧券	大人	880 円
	中学生以下	330 円
大洲城、盤泉荘、臥龍山荘共通観覧券	大人	1,100 円
	中学生以下	440 円
※保護者同伴の5歳以下の幼児 無料		
※市内に住所を有する65歳以上の方 無料		
※身体障害者手帳などを有する方、またその付き添い1名 無料		
観覧時間	午前9時～午後5時(札止は午後4時30分)	
定休日	なし	

庭園及び建造物については、指定管理者団体による案内が行われている。観光客に向けては「おおず歴史華回廊」という認定案内人が紹介する有料のまち歩きツアーもある。大洲のまちなみと一緒に臥龍山荘を巡るコース（臥龍山荘 豪商と名工の足跡をたどる旅）は、所要時間 1 時間半で定員 5 名とし、毎日開催している。ほかにも大洲の名所を巡るコースが設定されている。

（2）交通アクセス

本庭園への来園者は主に徒歩、または自家用車や大型バスで来園している。名勝範囲外である本庭園の北側に普通乗用車 4 台分の駐車場を設けており、そのうち 1 台分は身体障がい者用としている。

近隣には 5 箇所に観光駐車場が設けられており、本庭園に近い駐車場は、河川敷駐車場と大洲まちの駅あさもやである。自家用車での来園者はこれらの駐車場を利用し、周辺の町並みや昭和 41 年（1966）の NHK 朝のテレビドラマ「おはなはん」のロケが行われたおはなはん通りなどを散策しながら、本庭園を訪れている。団体観光客などは大洲まちの駅あさもやまたは観光第一駐車場に大型バスを駐車し、徒歩にて来園している。

ただし、近年は観光客の増加により駐車場が不足し、駐車場の確保が課題となっている。

〔表 4-1〕 近隣駐車場情報

駐車場	住所	時間	料金	収容台数	臥龍山荘までの 所要時間
臥龍山荘駐車場	大洲市大洲 398-11	—	無料	乗用車 4 台	徒歩 1 分
河川敷駐車場	—	—	無料	乗用車約 10 台	徒歩 1 分
大洲まちの駅あさもや	大洲市大洲 891-1	8：00～22：00	無料	大型バス 6 台 乗用車約 40 台	徒歩 5 分
観光第一駐車場	大洲市大洲 635-9	—	無料	バス 4 台 乗用車 47 台	徒歩 11 分
観光第二駐車場	大洲市柚木 386-3	9：00～17：00	無料	バス 2 台 乗用車 13 台	徒歩 7 分
庁舎立体駐車場	大洲市大洲 1034-2	7：30～21：00 土日祝のみ	無料	約 60 台	徒歩 10 分
市民会館駐車場	大洲市大洲 891-1	8：00～22：00	有料	約 50 台	徒歩 15 分



〔写真 4-20〕 臥龍山荘駐車場



〔写真 4-21〕 大洲まちの駅あさもや



[図 4-9] 近隣駐車場位置図 (地理院地図に加筆)

(3) 活用の実績

①観覧者の動向

年間観覧者数は平成 22 年度の 2 万人前後から、平成 30 年度には 4 万人強まで増加している。月毎の動向では、5 月と 11 月に多く、ピーク時の観覧者数は 1 日当り 400 人前後である。外国人観光客向けの旅行ガイドへの掲載もあり、平成 30 ～ 31 年度には外国人観光客が全体の約 15%を占めている。平成 30 年度に実施されたインバウンドアンケート調査では、回答者のうち約 84%がアジア圏で、そのうち韓国からの来訪者が 50%を超えた。

令和 3 年度からは周辺宿泊施設利用者向けの早朝特別観覧を開始し、開園前の時間に宿泊者限定の貸切ツアーで案内している。初年度はコロナ過においても年間 18 組の利用があった。

②施設利用

施設内での撮影、会議などについては指定管理者の許可を受け、有料にて利用することができる。民間事業者の企画による「観月会」（鵜飼い、中秋の名月鑑賞、特別呈茶の催し）が平成 28 年度に実施され、2 日間で 26 名が参加した。ほかにも団体のカルチャーツアーで茶席として不老庵が利用されている。また、年間数件程度ではあるが、成人式や婚礼などの前撮り撮影にも利用されている。観覧者の多い週末は避け、平日に時間制の利用料金で 1 時間 1 万円としている。

[表 4-2] 観覧者数一覧（令和6年2月末現在 臥龍山荘提供）

年度 月	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31 (R1)	R2	R3	R4	R5
4	1,866	2,010	2,961	2,099	1,933	2,372	2,816	3,917	4,144	3,879	182	642	2,156	3,795
5	3,114	3,177	3,987	3,156	3,045	4,147	4,662	5,978	4,654	5,229	—	—	4,065	5,424
6	1,590	1,738	1,637	1,601	1,638	1,895	2,730	3,016	3,154	2,664	197	823	2,589	3,684
7	1,421	1,480	1,937	1,548	1,580	1,715	2,721	2,510	1,222	2,430	1,041	1,301	2,601	2,460
8	1,975	2,353	2,293	2,056	2,096	2,494	3,848	3,125	2,193	2,887	1,544	1,167	2,803	3,010
9	1,631	1,832	2,154	2,050	2,359	3,059	2,870	2,476	2,491	2,872	1,607	1,269	2,837	3,087
10	2,001	2,116	3,790	2,082	2,320	3,405	4,016	2,716	3,760	3,415	2,428	2,093	3,710	4,029
11	2,375	3,401	3,732	2,656	3,246	4,001	5,437	5,311	8,084	5,288	4,464	3,540	6,389	7,279
12	781	2,251	1,343	1,259	1,348	1,644	2,228	2,264	3,225	2,266	1,824	1,913	3,327	3,579
1	845	1,755	1,344	1,334	1,399	1,211	1,585	1,832	2,463	2,134	497	1,149	2,128	3,005
2	956	1,626	1,505	1,097	1,288	1,468	1,527	1,804	2,295	1,817	610	804	2,755	3,073
3	1,275	2,556	2,219	1,851	2,879	2,589	3,179	2,977	3,791	1,125	1,169	1,576	3,802	
合計	19,830	26,295	28,902	22,789	25,131	30,000	37,619	37,926	41,476	36,006	15,563	16,277	39,162	42,422
外国人 観光客の 割合	-	-	-	-	-	-	1,767 (5%)	3,027 (8%)	6,391 (15%)	5,242 (15%)	52 (0.3%)	77 (0.5%)	933 (2%)	9,847 (23%)

※令和2～3年度の4～5月は新型コロナウイルス感染症拡大防止により休館

③情報発信

庭園及び建造物の魅力を案内するパンフレット（日本語、多言語版）を作成し、受付や市内各所で配布するとともに、本市のウェブサイトにも掲載している。臥龍山荘のウェブサイトやSNSは指定管理者団体が管理運営し、建造物や庭園の四季の写真を掲載し、魅力を伝えている。

平成28年度には建造物3棟の重要文化財の指定を受け、指定記念シンポジウムを開催するとともに、「臥龍山荘」国重要文化財指定記念特別展「臥龍山荘～肱川にたたずむ明治期の数寄屋建築」を平成29年（2017）1月21日～4月16日に大洲市立博物館にて開催した。また、令和4年度には本庭園の名勝指定を記念したシンポジウムを開催した。これらにより、市内外に向けて臥龍山荘の建造物及び庭園の価値や魅力を広く情報発信した。

④学校教育

地域の小中学校の総合学習や歴史学習、遠足や修学旅行先など学校教育の場として活用されている。また、農業高等学校の造園に関する学習や市立博物館の大洲歴史文化教室などにも活用されるなど年間7校前後の利用がある。学校関係の利用では20～100名前後が来訪し、庭園及び建造物の案内については、指定管理者団体がやっている。

⑤調査研究

本市では平成29～31年度に名勝地調査事業を実施した。名勝地調査事業以降、作庭当初の姿を検証するための史料の収集、埋蔵文化財担当による埋没した石段や園路などの遺構調査を継続して実施している。

⑥歴史や文化体験の検討

活用に向けては、令和元年度に本市観光まちづくり課が事務局となり、文化財観光施設を活用した歴史体験検討委員会（大洲市、大洲市観光まちづくり戦略会議）を設置し、本来文化財が持つ価値を最大限に発揮することにより、さらなる認知度の向上を図ることを目的として「文化財観光施設を活用した歴史体験実施計画」を策定した。さらに、委員会による検討と合わせて、住民向けのシンポジウム、説明会を開催し周知を図った。令和4年（2022）3月には「大洲観光まちづくり戦略ビジョン」を改定し、周辺施設の整備が進められている。

令和3年度には重要文化財臥龍山荘において文化体験による活用を図る目的で、文化庁「ウィズコロナに対応した文化資源の高付加価値化促進事業」の採択を受け、指定管理者団体が臥龍山荘文化体験事業を実施した。観光への活用方法、まちづくりへの活かし方などを検討し、専門家会議で取りまとめた基本構想などを踏まえて、実証実験「数寄の宴」及び「臥龍山荘文化体験シンポジウム」が開催された。

実証実験はモニターツアーとして客人を招き、川舟での遊覧、呈茶（不老庵）、宴席（壺是の間、清吹の間）、能楽（壺是の間）が行われた。シンポジウムは、令和3年（2021）12月19日に基調講演とパネルディスカッション「地域文化と観光まちづくり - 臥龍山荘文化体験を通して -」が行われた。

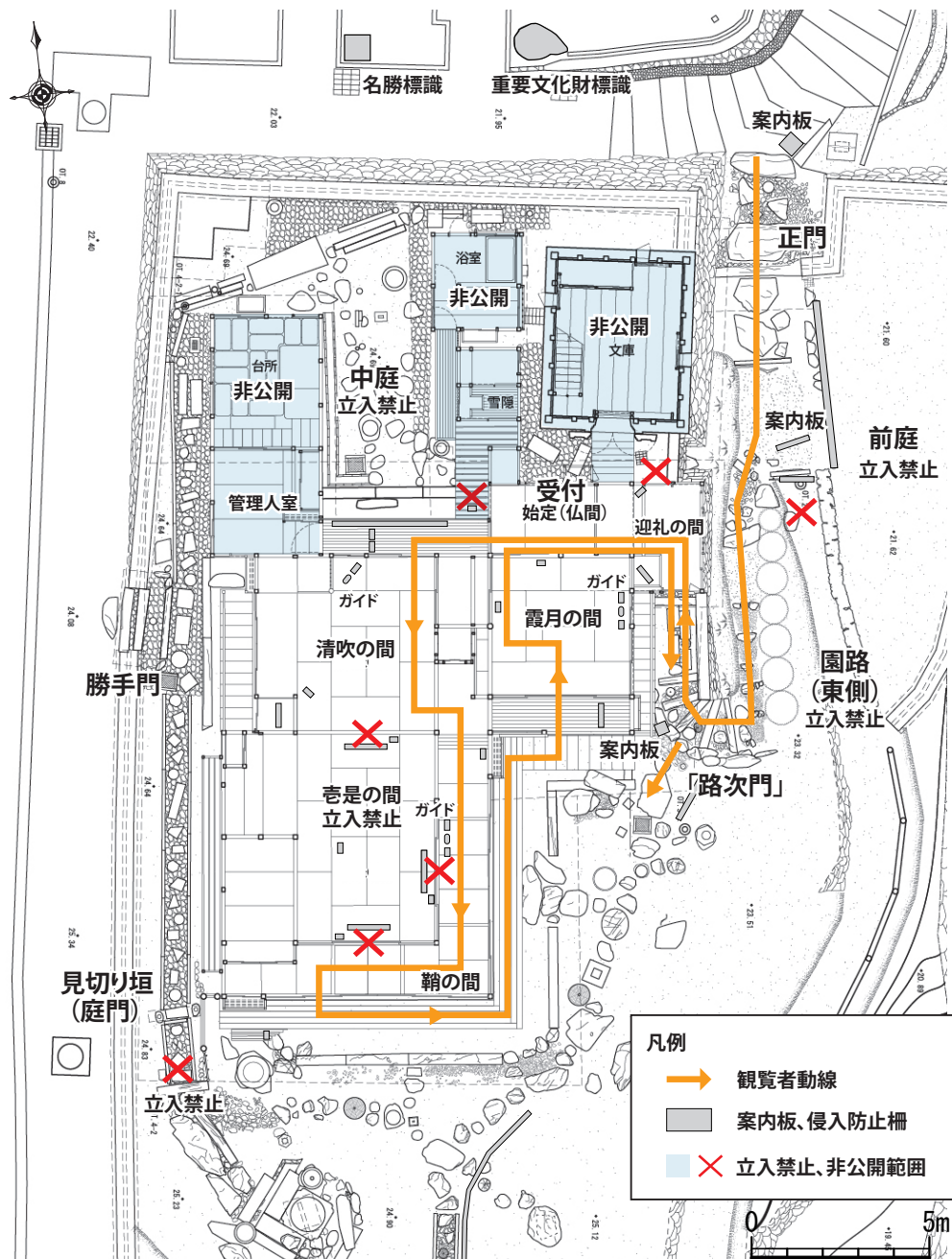
（4）公開動線

公開範囲は名勝全域であり、建造物では臥龍院と不老庵へは内部への立入り公開、知止庵は内部を公開しているが、立入り禁止としている。庭園内に自由な散策が可能であるが、東側の園路と崖地及び石垣へは危険が伴うため、立入りを禁止している。

観覧者は敷地北端にある正門を潜って入り、臥龍院内に設けた受付を済ませて臥龍院内部を観覧後に庭園を散策する。臥龍院内部では始定（仏間）を入ると、右手に臥龍院中庭を見ながら清吹の間を通過して鞘の間へ到る。壺是の間は立ち入りを禁止しているため、観覧者は鞘の間から庭園を觀賞する。そして、鞘の間を戻り、霞月の間を見学した後、再び始定（仏間）を通過して屋外へ出る。

庭園へは「路次門」を潜って入り、飛石伝いに見学が可能である。知止庵は躡口から内部を見学出来るように開放しており、不老庵は北縁から座敷に上がって眺望を楽しむことができる。不老庵附属の茶室は通常非公開としているが、お茶会などの催しの際は内部を利用している。

蓬萊山は一般開放されており、常時自由に散策ができるようになっている。蓬萊山へは正門を出て階段を下り、河川敷に設けられた渡河橋によって渡ることができる。河川敷からは臥龍の淵の眺望を觀賞でき、尾根筋に設けられた園路を登ると蓬萊山側から見た主庭の地形や眺望を觀賞することができる。



〔図 4-10〕 現状の公開動線（臥龍院内）



〔写真 4-22〕 名勝の標識



〔写真 4-23〕 順路案内板



〔写真 4-24〕 庭園入口の案内板



〔写真 4-25〕 順路案内板

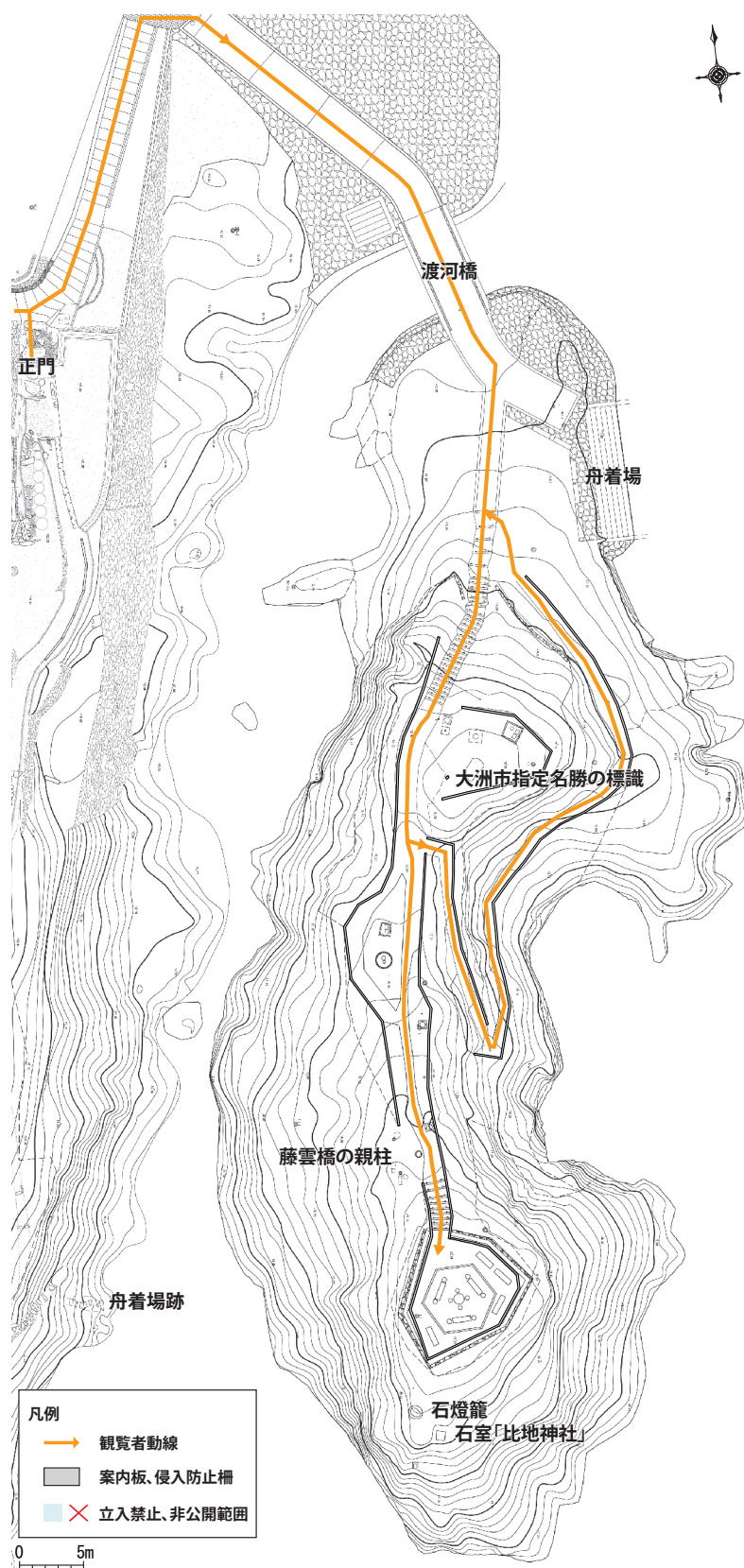


〔写真 4-26〕 知止庵の音声ガイド



〔写真 4-27〕 「潜龍洞」の解説板

〔図 4-11〕 現状の公開動線（主庭）



〔図 4-12〕 現状の公開動線（蓬萊山）



〔写真 4-28〕 大洲市指定名勝の標識



〔写真 4-29〕 蓬萊山より西を望む



〔写真 4-30〕 蓬萊山より不老庵を望む



〔写真 4-31〕 蓬萊山より南を望む

第2項 公開活用における課題

公開活用における課題として、施設などハード面のほか観賞方法などソフト面の課題が挙げられる。

(1) 施設関連の課題

- ・案内板や説明板などの多言語対応

説明や注意喚起などにおいて、多言語への対応ができていない部分がある。

- ・擬木柵や擬木階段の損傷

蓬萊山の擬木柵の老朽化や擬木階段の損傷、表土流出が見られる。

- ・照明設備の不足

蓬萊山は常時開放しているが、園路沿いの照明設備が不足しており、夕方以降の散策時は足元が暗い。また、既設照明の一部が平成30年（2018）7月豪雨により傾倒している。

- ・侵入防止の劣化や設置

侵入防止柵の劣化、並びに侵入防止柵の高さによって観賞へ支障をきたしている箇所がある。

(2) ソフト面の課題

- ・庭園本来の視点場の立入り制限

臥龍院の壺是の間が立入り禁止のため、本来の視点場から庭園を観賞できない状況にある。

- ・コケの踏圧への注意喚起

観覧者が園路を通行する際、すれ違い時などに飛石から降りることがあり、園路の周囲のコケが踏圧の影響を受けている。

- ・関連文化財や地域との連携

現在、ほかの施設との共通券の販売やお舟めぐりの実施など、関連文化財や地域との連携を図っている。現状の連携体制を維持し、さらに密な連携を図っていく必要がある。

- ・関連資産との周遊や情報発信

本庭園の関連資産である亀山や河内寅次郎の墓所など位置や経路が分かりづらいため、案内を充実させる必要がある。



〔写真 4-32〕 照明の傾倒



〔写真 4-33〕 侵入防止柵設置の状況



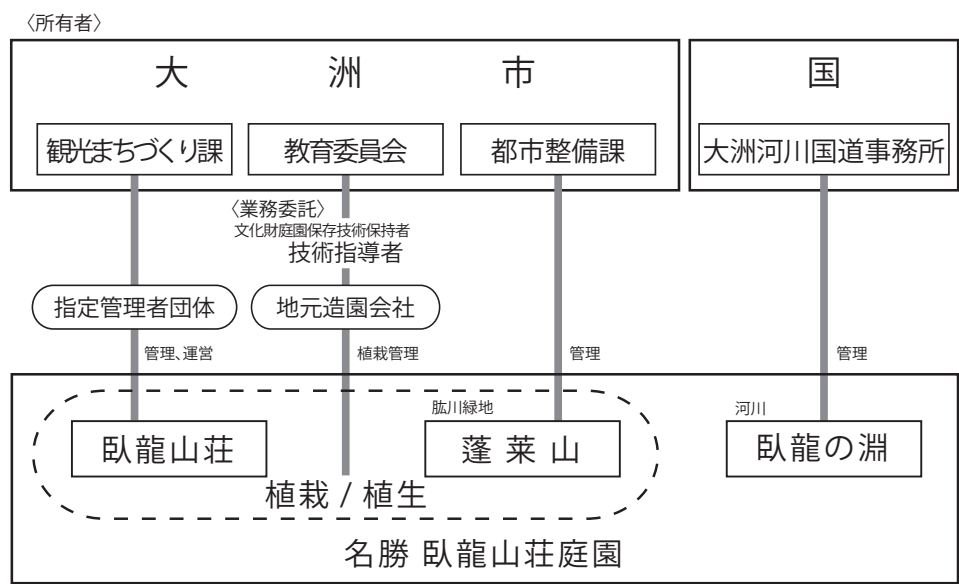
〔写真 4-34〕 踏圧によるコケの消失、育生不良

第3節 管理及び運営体制における現状と課題

現状は本市が指定管理者団体に管理及び運営業務を委託する指定管理者制度を採用しており、指定管理者は臥龍山荘の利用許可、観覧に係る料金収受、施設設備の管理、そのほかの管理及び運営に必要な業務を行っている。

庭園の植栽管理については、植栽管理技術指導と年間管理の業務委託を行っており、文化財庭園保存技術保持者の指導のもと、文化財庭園保存技術者協議会所属の造園技術者による植栽管理がなされている。技術指導は平成28年度より実施しており、長期的な視点で管理を行うため、今後も継続していく必要がある。また、安定的な管理体制を続けるために、技術の伝承や後継者育成が求められる。

管理及び運営体制において特に課題はないが、今後も連携を図り自主事業や文化財に係る手続きなど、密な連絡体制を構築する必要がある。



[図 4-13] 管理及び運営体制図

[表 4-3] 植栽管理の年間スケジュール（令和4年度参考）

期間		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
臥龍山荘（主庭、臥龍の淵）	軽剪定													年3回
	基本剪定													3月頃
	除草													年4回
	竹切作業（伐採）													年4回
	石垣除草													年5回
	草刈													年5回
蓬萊山	整姿作業													年2回
	落葉清掃													年4回
	草刈													年4回